

多言語学習ハンドブック

—キャンパスアジア・プログラム生と
全ての多言語学習者のために—

湯川笑子・清田淳子・庵^{あんざこ}辻由香（編著）



キャンパスアジア・プログラム

立命館大学文学部

多言語学習ハンドブック

—キャンパスアジア・プログラム生と全ての多言語
学習者のために—

湯川笑子・清田淳子・庵途^{あんご}由香（編著）

2022年

目 次

はじめに	1
第 I 部 多言語学習に関する 12 の問い	3
① CAP では初修外国語を 2 つ同時に学ぶというカリキュラムになっている。そもそも学校教育で複数の初修言語を同時に学ぶのはよくあることなのか	3
コラム: 中国語と韓国語(朝鮮語)を話す、グローバルな人になる(庵途由香)	5
② 英語を学ぶのに小学校からもう 8 年もの長い年月をかけている。2 つめや 3 つめの外国語は、英語を学んだ時よりは短い時間で習得できるのか	6
コラム: 朝鮮語-最初のつまづきと漢字圏の強み(金津日出美)	9
③ 外国語学習に秘訣はあるか	10
コラム: 友だちを作る、マイノートに単語や表現、すぐ使う!(福田佳奈)	15
④ 発音に関しては年齢の低い方が有利だとよく聞かすがこれは正しいか	16
⑤ 外国語学習において個人差はどのようにして生まれるのか	18
コラム: 中国語・韓国語の 2 言語を一緒に学ぶ(山本一)	23
⑥ 1 つの言語を学ぶ時にはそれ以外の言語は使わないという〇〇語漬けの方法は有効か	24
⑦ CAP1 期生はトランス・ランゲージングを実際どのように行っていたのか	27
コラム: 人々が共生していくための言葉の力(清田淳子)	29
⑧ 〇〇語検定で上級とみなされる試験に合格したが、自分がイメージしていたほど自在にしゃべったり使いこなせたりするわけではない。このギャップをどう考えたいのだろうか	30
コラム: キャンパスアジアでの学びを生かし韓国系企業へ就職…(今井詩文)	33
コラム: 韓国・中国籍のお客様とその言語で会話できた日は一日とても幸せな気分(山原萌)	34
⑨ 異言語だけでなく異文化のぶつかりあいの中で、グループワークなどで司会やまとめ役を務めるのは難しい。これは、言語力とは別の能力・スキルがいるからではないか	35
⑩ 外国語で内容を学ぶ教授法は一般的か	38
⑪ そもそも複数の言語を学ぶことの利点は何か	42
コラム: 他者理解の大きな向上をもたらした 2 言語 2 文化学習(袴田媛香)	45
⑫ ICT(情報通信技術)の発達で外国語教育・学習に大きな変化をもたらしたか	46
コラム: 私のオンライン留学(菅澤夢乃)	49
第 II 部 複言語学習の実践-CAP1 期生の学習記録から	50

はじめに

立命館大学文学部教員
湯川笑子



本書は日本語・韓国語・中国語・英語を駆使できる人になりたいと努力しているキャンパスアジア・プログラム（CAP）履修生の皆さんと、言語の組み合わせはCAP生とは異なっても大学で複数の初修外国語を学ぼうとしている方を対象に、言語学習が心理的にまた実質的に楽になるようにと願って書き下ろしたハンドブックです。

立命館大学の文学部には、中国語と韓国語を同時に学習し、2回生時と3回生時には提携大学に1学期ずつ2年間留学して現地で学ぶという、「立命館型」キャンパスアジア・プログラムがあります。筆者らはそのキャンパスアジア・プログラムの参加者の言語学習をパイロット生（2011年度-2014年度の1学年限定）の時から見守ってきました。その中で、CAP生の悩みや疑問、および学生が独自に生み出した学習ストラテジーなどを聞いてきました。本ハンドブックには、こうしたCAPの先輩らの経験と、多言語を学ぶ皆さんに助けとなるのではないかと思える応用言語学分野の知見をまとめました。

立命館大学ではCAP履修生に限らず、大学での専門領域のニーズに対応すべく英語に加えてさらに複数の外国語を学ぶ人が増えていることを筆者らは認識しています。したがって、このハンドブックは、複数言語を習得しようと努力している人なら誰でも共通に生かせる知見を含むよう、対象読者を広く設定しました。CAP以外の複数言語学習者の場合には、本ハンドブックの中に出てくる「中国語」や「韓国語」を、ドイツ語なりイタリア語なり、自分に当てはまる言語に読み替えてください。

（このハンドブックでは言語の名称として「韓国語」と「朝鮮語」を使います。主には「韓国語」を使用し、教育機関での科目名称を指す場合等に「朝鮮語」も使用します。）

第 I 部 多言語学習に関する 12 の問い

このハンドブックの構成は次のようになっています。

まず第 I 部では、複数言語学習者が学習に対して見通しを持ったり学習のコツを身につけられたりするようにと選んだ 12 のテーマについて、「質問—回答」形式で説明しています。応用言語学の知見を生かしつつ、あまり専門的になりすぎないよう、平易な言葉で解説しました。

第 II 部では、英語に加えて中国語と韓国語を集中的に学習した常設化 CAP1 期生（2016-2019 年度在学）が 3 回生になった時にどのような言語能力を持っていたのか、また中国や韓国の提携大学に留学しているときに日本語、中国語、韓国語の 3 つの言語をどのような頻度で使っていたのかについて研究した論文の中からエッセンスを簡潔に紹介します。さらに、同じ 1 期生がどのように 4 つの言語を戦略的に使い分けることによって生活や学習の様々な場面を生き抜いていったのかについて、本人らのインタビュー結果をもとに描写した論文がありますので、それについても重要な部分を簡潔に紹介します。

また、関連の箇所には、CAP の担当者である先生方の助言、先輩たちの成果や苦労話、また、経験の中で培っていったストラテジーを、コラムという形式で挿入しています。第 I 部、第 II 部で説明したことに、多言語プログラムの先生と多言語学習を経験した先輩の臨場感あふれる語り加わること、より自分に身近な情報として伝わることを期待しました。本ハンドブックは、湯川笑子、清田淳子、庵途（あんご）由香が編集者として構想を考え編纂しました。コラムには編者以外の関係者や先輩に執筆いただき、それぞれ執筆者の名前が記載されています。名前の記載のない箇所は全て湯川が書きました。

皆さんの多言語への挑戦を応援しています。頑張ってください。

① CAP では初修外国語を 2 つ同時に学ぶというカリキュラムになっている。そもそも学校教育で複数の初修言語を同時に学ぶのはよくあることなのか

【回答—はい】

多言語学習が行われている状況を考えてみましょう。

基本的に人は外国語を実際に使うために学びます。使うニーズが高い筆頭格は英語です。世界のグローバル化に伴って、人や物の交流のために世界中の人々が英語を学んでいます。インド、フィリピン、シンガポール、香港などのイギリスの旧植民地国では、植民地支配をしていた宗主国の言葉である英語が歴史的にその社会の行政機関や高等教育機関にすでに浸透していることと、現在、実質的に世界の公用語であるという 2 重の理由から、今でも高等教育、政治、マスコミで英語が広く使われているのはご存じのとおりです。スイスのように、地理的な事情でドイツ語、イタリア語、フランス語、ロマンシュ語の 4 言語を公用語としている国や、カナダのように歴史的な事情で英語とフランス語の 2 言語政策をとっている国もあります。さらに、家族で移民として自国とは異なる国に住んでいる場合には、学童期の児童・生徒および学生は、自分の家族の言葉の他に、移住先の言葉や移住先で学ばれている外国語など、複数の言語を学ぶことになります。

スペインの北西にバスク自治州というバイリンガル教育の文献でよく登場する地域がありますが、ここでは国の言語であるスペイン語と地域・民族の言語であるバスク語を両方学べるイマージョン教育という方法で学校教育を展開しており、それに英語を加えた 3 言語をどう教えるかといった方法について多くの研究論文が発表されています。また、ヨーロッパでは、欧州評議会（Council of Europe）^{注1}という、人権、民主主義と法の支配を実現するための大きな組織が、言語教育についても加盟国に指針を示しています。そこでは、**複言語主義（plurilingualism）**^{注2}という表現を用いて、一国の中に複数の言語が存在しているだけではなく、また、個人の持っている言語能力を完全に分離したものとするのではなく、複数の言語を知っているマルチリンガルどうしが自らの全ての言語

知識と技術（以後「言語リソース」と呼びます）を互いのコミュニケーションに生かしていくことを推奨しています。

日本でも、文部科学省が行った調査によると、2018年（平成30年）5月1日現在、高校で英語以外の外国語科目を教えている学校は全国で677校（全国の高等学校数は定時制と通信制を含め約5000校^{注3}）、全部で18の言語を44,753名の生徒が学んでいます。言語は学習者の多い順に、中国語、韓国・朝鮮語、フランス語、スペイン語、ドイツ語となっています^{注4}。大学では多くの場合第2外国語が必修となっているのはご存じのとおりです。

このように、母語以外の言語を2つ以上学んでいる子どもや大学生は世界中に非常に多いことが分かりますが、まずは英語をしばらく学んだあとに2つめの外国語を学ぶといった具合にタイミングに差のあることが多いので、立命館型CAPのように、地域の言語でも家庭の言語でもない、初修外国語を集中的に2言語学ぶプログラムは珍しく、また、同様にCAP外でも初修外国語を2つ以上同時履修している皆さんのケースは、大変意欲的な言語学習者であると言えます。複数言語学習のパイオニアとして誇りを持って学んでください。

注1：2021年現在で47か国、日本はオブザーバー国外務省ウェブページ

<https://www.mofa.go.jp/mofaj/area/ce/index.html> より

注2：この複言語主義および複言語主義について書かれた欧州評議会出版の言語教育に関する文書に、『欧州共通言語参照枠』があり、以下からダウンロード可能です。<https://www.coe.int/en/web/common-european-framework-reference-languages>

注3：文部科学省（2020）「高等学校教育の現状について令和2年10月1日」
https://www.mext.go.jp/a_menu/shotou/kaikaku/20201027-mxt_kouhou02-1.pdf

注4：文部科学省（n.d.）「平成29年度高等学校等における国際交流等の状況について」

https://www.mext.go.jp/b_menu/houdou/31/08/_icsFiles/afieldfile/2019/09/19/1420498_001_1.pdf 11頁

コラム：中国語と韓国語(朝鮮語)を話す、グローバルな人になる



立命館大学文学部教員

あんざい
庵達由香

言葉は、コミュニケーションのためのとても重要な道具です。外国語を学ぶということは、その国の人々に向かって開く「窓」を作るようなもの。作る「窓」が大きくてしっかりしていれば、それだけ多くの外国語を話す人々と、深く交流することができます。

日本と中国、韓国（朝鮮半島）は、日本が行った侵略戦争の歴史をめぐる葛藤を抱える一方で、「漢字」という同じ文化を共有しつつ、長きにわたる交流の歴史を持っています。現在では経済的にも3か国が相互に重要なパートナーとなっていて、人の往来も2018年には日韓で1045万人、日中で1069万人と、急速に増加しています。また、韓流ドラマや華流ドラマ、K-pop、C-popも私たちの日常になっています。

今後ますます近くなっていく日中韓3か国は、これからも友好関係を維持し発展させていく必要があります。相手のことを深く知るには、まず言葉から。それは昔も今も変わりません。ところが、中国と韓国には日中韓の3か国語を話せる若い人がたくさんいるのに、日本にはまだまだ、日中韓トリリンガルはそれほど多くありません。皆さんのように中韓両方に関心を持つ世代に、どんどん挑戦して行ってほしいです。

若いからこそ、積極的にトライできる2か国語学習。最初は小さな2つの窓でも、言葉を直接交わすコミュニケーションを通じて、それはいずれ、「東アジア」という大きな窓へとつながっていくことでしょう。日中韓の3言語を身につけた皆さんこそ、様々な場での東アジアの交流の「要」になってくれると信じています。皆さんの活躍の場は、東アジアに、そして世界にも広がっているのです。

② 英語を学ぶのに小学校からもう 8 年もの長い年月をかけている。2 つめや 3 つめの外国語は、英語を学んだ時よりは短い時間で習得できるのか

【回答—はい】

大学で初修外国語を学ぶ時の上達の速さは、学ぶ言語と日本語の類似度、学習者の動機、教え方、適性など、様々な要因によります。しかし、英語を学び始めた時と比べて、大学生である皆さんは年を重ねているため全般的な**認知能力**が高く、外国語学習というものを経験している**分言語に関する知識**や**学習ストラテジー**を身につけているという点で、大きな利点があります。

小学校に英語教育を導入するかどうか議論されていた 2000 年代にスペインで行われた研究ですが、小学校 3 年生と小学校 5 年生が、数年かけて約 200 時間とか 416 時間などという風に一定の同じ時間学習した時に、どちらが多くを学ぶかといった調査が行われました。もちろん軍配は年齢の上のグループに上がりました。ましてや、大学生になった皆さんは、言語の仕組みを理解したり、覚えなければならない単語を自分なりの方法を使って覚えたり、覚えた単語を試しに試してみたり、文章を社会常識に照らして理解したり、小テストに向けて集中的に勉強したり、など年少者には不可能な、多くの学習促進のための工夫をこらすことができます。これらはみな語学学習に必要なストラテジーです。

さらに、皆さんはすでに英語を勉強した時に、文の構成要素を語るのに便利な「名詞」、「動詞」と言った品詞という分類があることや、その語の文内の機能（主語、目的語など）についても、文を理解したり生成したりする時の大きな手がかりとして熟知しています。発音についても、外国語には日本語にはない音があって、それに慣れるには口の動かし方を頭で理解しつつ何度も繰り返して聞いたり発音したりして会得するのだと知っていますし、音素（＝意味の区別を生じさせる音の最小単位）とその言語の文字には独特の対応関係があることも知っています。したがって、皆さんの持っている言語全般についての知識、言語学習のストラテジー、社会的・文化的な広い知識や、大人として体力とともに充実してきた集中力をもってすれば、小中高時代と比べて学習のスピードは速まるに違いありません。

母語と 2 番目の言語（つまり最初に学ぶ外国語）に加えて、3 番目、4

番目という風に学んでいく複数の言語の相互の関係は「第 3 言語習得」（第 3 言語以上の習得も含む）という総称で、応用言語学では一つの研究分野となっています。言語は相互に影響しあいますが、その要因は、言語がどの程度似ているか（**言語間の距離**）、それぞれの言語がどの程度の**習熟度レベル**にあるか、それぞれの言語を**使う頻度**、学んだ時期からの**経過時間**などがあげられると言われてしています^{注5}。CAP で学ぶ韓国語と中国語の場合は、先輩たちの様子を見てみると、日本語と文の構造が似ていて中国語にある声調も存在しない韓国語の方が易しいと感じる人が多いようです。

言語間の距離が学習時間に与える影響については、白井（2008）^{注6}が、Odlin（1989）を引用して、アメリカ人学習者にとっての言語の難しさ（上級レベルに到達するまでに要する時間）を示しています。「週 30 時間の集中コースで上級レベルに達するまでに必要な学習時間」を見ると、20 週で到達するフランス語、ドイツ語などといったヨーロッパ言語に対して、アラビア語、日本語、タイ語といった、英語とは言語体系が異なる言語の場合は 44 週かかるとしています。

もう 1 つ、すでに言語を 1 つ知っている人は、別の言語にその知識を転用できることをバイリンガル教育の立場から示した有名な理論があります。それは、ジム・カミンズという人が提唱した「共通基底能力モデル」というものです。これは 2 つの言語を、水面上ではそれぞれ独立しているように見えていても水面上ではつながっている氷山にたとえて、言語能力が基底部分では共有している部分があるのだと主張しました。この比喻のために、氷山モデルとも呼ばれています。英語の *pharmacy*（薬局）とスペイン語の *farmacia*（両方とも薬局の意）のように親戚関係にある単語はすぐに覚えることができます。統語のルールや、談話や文書の組み立てに至るまで、一度学んだことが別の言語でも共通に生きてくることは多々あります。

注 5：第 3 言語（以上）の習得についての研究文献は英語で書かれたものがほとんどです。このテーマ全体を概観したものに以下があります。

Hammarberg, B. (2001). Roles of L1 and L2 in L3 production and acquisition. In J. Cenoz, B. Hufeisen & U. Jessner (Eds.), *Cross-linguistic influence in third language acquisition: psycholinguistic perspectives*. (pp. 21-41)

Multilingual Matters. <https://doi.org/10.21832/9781853595509-003>

Puig-Mayenco, E., Alonso, J. G., & Rothman, J. (2020). A systematic review of transfer studies in third language acquisition. *Second Language Research*, 36(1), 31-64. <https://doi.org/10.1177%2F0267658318809147>

注6：白井恭弘（2008）『外国語の科学—第二言語習得論とは何か』岩波 新書



コラム：朝鮮語-最初のつまづきと漢字圏の強み



立命館大学文学部教員
金津日出美

皆さんの中には、すでに k-pop や韓流ドラマなどで簡単な朝鮮語の単語を知っている、朝鮮語の音に耳が慣れている、あるいは言語だけではなく韓国料理にはまっているという人も多いでしょう。ただ、きちんと勉強しようとすると、形は違っても漢字を使う中国語と違い、記号にしか見えないハングルやパッチム、変則活用などがある朝鮮語を「難しい!」と感じますね。特に当初は、日本語にない発音や、音がリエゾンして文字と違うなど、四苦八苦していませんか。また、カタカナ化した言葉が身近にありすぎて、日本語的な発音から抜け出せないといったこともあるでしょう。たとえば、キンパ、トッポギ、ビビンバなど、「김밥」「떡볶이」「비빔밥」(あえて書けばキムパッ、ットッポッキ、ビビムパ) のパッチム音がうまく出せないという悩みですね。このカタカナ癖の習慣を早いうちから取り払うためには、ハングルの音をカタカナ表記しないようにするのが一番です。そうすれば、発音はもちろん、ハングルにも早く慣れることができるでしょう。

また、朝鮮語は日本語と語順が似ているので、初級文法をマスターすればある程度コミュニケーションが可能です。話したいことについて言葉を並べていく。となると、あとは語彙力。単語帳で一語一語「日本語で○○は朝鮮語で△△」と覚えなければと考えるかもしれませんが、「労多くして功少なし」ということもしばしば。そこでの強い味方が漢字! 実は朝鮮語は日本語と同じ漢字語も多いので、一つ一つの漢字の朝鮮語読み(またはその法則)さえ分かれば、語彙を増やす労力は半減します。スキマ時間を使って漢字語アプリで手軽に学んだり、しりとりや要領で「公演/공연→演習/연습→習得/습득…」と増やしていったり。他にも「義・議・疑・儀=의」のように同じ音読みの漢字は同じハングルだったりします(もちろん例外はあります)。「もしかして/혹시=或是」といった接続詞などにも漢字は隠れているだけでなく、中国語と共通する場合もあったりして、漢字圏をつなぐ言葉の妙を楽しんでみてはいかがでしょうか。

③ 外国語学習に秘訣はあるか

【回答—インプット、アウトプット、フォームへのこだわり、全資源の活用】

このカプセルを飲めばたちどころに〇〇語がしゃべれるようになる、というような意味での即効性のある秘策はありません。しかし、母語以外の言語を学ぶ過程を研究対象としている第2言語習得研究という学問分野の研究者なら誰も指摘する共通点があります。そうした「外国語習得に不可欠な要素」の中から、ここでは4点をあげておきます。

まず第1に外国語学習に絶対に必要なのは**大量の良質のインプット**です。自分が学ぼうとする言語をふんだんに聞いたり読んだりすることなしにその言語を習得しようというのは、ピアノを聞いたことがないのにピアノが上達する、あるいはプールで泳いだことがないのに水泳がうまくなるのを願うようなものです。1970年代に南カリフォルニア大学のクラッシュェンという学者が、外国語習得は学習者が理解可能なインプットを得て、その理解可能なインプットが雪だるま式に増えていくことで起こるのだと言いました。人は前後関係や文章が使われた状況によって、未知の単語の意味をある程度推測することができます。今、第2言語教育分野では、そのインプットのみで他の要素が不要だとまでは言わないものの、良質のインプットが言語習得に不可欠だというのは共通して受け入れられています。

したがって、内容の理解を求めて、言い換えれば、自分が内容的にも興味があって理解したいと思える文章やお話などを、本、録音・録画テープ、オンライン上の情報から選んで毎日聞いたり読んだり、時にはそれをリピートしたりなどするとよいでしょう。これが三日坊主に終わらず継続できるためには、自分にとって興味をそそられる内容であり、かつ手軽にアクセスできるインプットであることが秘訣となります。

インプットに対して**アウトプット**、つまりしゃべったり書いたりすることについてはどうでしょう。幼児の母語習得期や、幼児期・学童期に突然国境を越えて移住せざるを得なかった子どもの第2言語習得期の初期の頃に、言われていることは分かるけれどほとんどしゃべれない「サイ

レント期」という期間が存在することが知られています^{注7}。学校教育における外国語教育においても、だいぶ分かるが増えてきたけれど、いざその外国語を話したり書いたりするととなると単語レベルでしか応答できないという悔しさを感じた人は多いのではないのでしょうか。

カナダの英語母語話者に対して小中の9年間の学校教育の50%以上をフランス語で教えることによって英仏のバイリンガルに育てるという、カナダのフランス語イマージョンと呼ばれるプログラムがあります。この生徒らを研究したスウェインという学者が、クラッシュェンのインプット仮説に対応する、アウトプット仮説というものを提唱しました。スウェインは、人は外国語を産出しようとして初めて自分の言語知識に欠けたところがあることに気づいたり、通じたかどうかで自分の知識・スキルが正しかったかどうかを検証できると言いました。

スウェインの指摘を待たずとも、皆さんは、できるだけ早く中国語や韓国語をしゃべりたいと思っているに違いありません。定型文を覚えるための方法として、自分の知っている言語能力よりかなり低いレベルの文章を耳から聞いて影のようにそのまま再現して追いかける「シャドーイング」という練習は、流暢さを増すための練習としてよく知られています。このような機械的なドリル練習の他には、ペアでの再話（＝テキスト内容をそのテキストを見ずに自分の言葉で伝えること）に短い会話を組み合わせた次のような方法があります。ペアで週に1度などという風に約束をしておいて、1ページ程度の直近に起こった身近なニュースやお話をお互いに読んできて相手に要約して伝えます。その際に多少自分の意見も添えて話し、相手から質問やコメントをもらうという方法です。100%自分の意見を言うわけではないので、何を言えばいいのか分からなくて困るということはありませんし、土台となるテキストを使うので、新しい語彙や表現も増えます。ただ再話するだけでは面白くないですが、お互いに多少コメントを加えるので（ごく短い）討論もできます。今は大学に来なくても予約してZoomを使えば顔を見ながら対話できますので、こうした練習ができる時間の幅は大きく広がります。

自分1人で、次の授業で言いたいことや発表したいことをシミュレーションしてしゃべる練習をするのもよい練習方法です。以前、ある会社の営業部の管理職の人が、世界のあちこちにある支社に勤務している人たちをつなぐ、英語でのオンラインで会議のまとめ役兼司会をどのようにこなしているか、というエピソードがテレビで紹介されていました。そ

の人は、事前に議論の展開を予測（シミュレーション）して、言わねばならないであろうと予測できるけれどどう言えばよいのか分からない表現や単語を、自分の、いわば会議用の「英語アウトプットノート」とでも呼ぶべきものを作って書き留めているという話でした。そのノートが何冊にもなっていました。個人のニーズにぴったりの素晴らしい学習方法だと思いました。アウトプットは相手がないとなかなか練習できませんが、相手の確保の方法を工夫したり、いわば「本番」にそなえて1人でシミュレーション・アウトプットを試してみたりしてはどうでしょうか。

3番目の重要な要素に、「フォーム」へのこだわりがあります。ここでいうフォームというのは、「意味」に対して、その意味を伝えるための発音、単語、語順、その他の文法・語法の規則全般を指します。「習うより慣れよ」ということわざがあります。文法ルールなどの知識をまず理解してから使うのではなく、場面ごとにコミュニケーションの必要に応じて使っていけばルールなどの細部の理屈も無意識的のうちに覚えていくという意味です。確かに語学学習には自然なコロケーションを理屈なしに覚えて使ったり、流暢さを増すためにコミュニケーションのみに注意を払って「慣れ」たりする時間をとることも必要です。ただ、それだけでは、幼児は別としてたいていの生徒・学生の場合には「フォーム」の細部は学べず、間違いの多い言語にとどまってしまうということが研究結果として発表されています。

確かに、文法や語法の理屈を学んで空所補充の問題ばかり解いて、実際に意味のあるやりとりに触れないのでは、言語は使えるようにはなりません。逆に、「習うより慣れよ」で一切フォームのルールやそれぞれの言語独特の仕組みにこだわりがないのでは正確さに欠けてしまうということをおぼえておきましょう。さらに言えば、「細かいことにこだわらなくてもコミュニケーションは成立する」とは必ずしも言えない場合があります。英語の場合を例にとると、単数・複数の違いや、the がつかどうかで意味が大きく変わる場合も多々あります。このような「細かい」ことが誤解を生み、コミュニケーションを阻害することすらありますので注意しましょう。

第4番目の秘訣として、皆さんの全ての言語的・認知的リソースを全

部使って学習することをあげておきます。1つの外国語を集中して学びその言語を使う国に単身で留学するような場合には、〇〇語漬けになって1年もすると母語であるにもかかわらず日本語をしゃべるのに単語を探して言いよどむ、というようなことが起こります。筆者も1980年代の初めごろペンシルバニアの田舎町に留学し、日本人や日本語の新聞・本などがほぼ皆無のところ、1年半暮らした際にそのようなことが起こりました。ただ、今はインターネットがあるので、どこにいてもいつでも日本の友達や家族と音信がとれますし、CAPの皆さんの場合には、日中韓の3言語を共通言語として持つ同級生とともに学ぶのですから、他の言語リソースを排除して1言語だけに浸るといった状況にはなりません。

CAPの先輩も、中国語での授業中に隣にいる韓国人の友達に授業内容について質問して韓国語や日本語で教えてもらったとか、韓国語を忘れてくれないので、日本に帰国後にTOEICの問題集で英語を勉強する時にあえて韓国語で書かれたものを購入したなどと言っていました。さらに、学習する科目が言語の授業ではなくて文化などの場合には、授業のテーマとなっている映画や歴史的の事物に関する知識を、事前にインターネットで日本語を使って検索し、予備知識を得た上で中国語（韓国語）での授業に臨んだと言っていました。上級者になってより専門性が深まれば、学んでいる言語でしか発表されていない情報を得たりすることも増え、その言語のみで生活が完結するといったことも起こってきます。しかし、そういう場合を除くと、複数の言語を使用する人たちはそもそも全ての言語能力とその言語を通して得た知識を生かして生きているのですから、言語の垣根を超えてリソースを最大限生かすのは自然なことだと言えます。バイリンガリズム研究の分野では、こうしたコミュニケーションの様態は「トランス・ランゲージング (translanguaging)」という用語で理論化されており、2000年代以降特に大きな注目を集めています。教育方法、学習方法、評価の方法などの側面からトランス・ランゲージングの実践を提唱し、同時にその際の留意点についても提示する論考がたくさん発表されています^{注8}。

以上、外国語学習の秘訣として、インプット、アウトプット、フォームへのこだわり、全てのリソースの活用をあげました。

注7：バトラー後藤裕子（2003）『多言語社会の言語文化教育－英語を第二言語とする子どもへのアメリカ人教師たちの取り組み』くろしお出版にその様子の記述があります。

注8：トランス・ランゲージングという概念を日本語で紹介したものに次の2点があります。

加納なおみ（2016）「トランス・ランゲージングを考える－多言語使用の実態に根ざした教授法の確立のために－」『母語・継承語・バイリンガル教育研究』12, 1-22

湯川笑子・加納なおみ（2021）「『トランス・ランゲージング』再考－その理念、批判、教育実践－」『母語・継承語・バイリンガル教育研究』17, 52-74

コラム：友だちを作る、マイノートに単語や表現、すぐ使う！



CAP 第2期生
福田佳奈

初めての留学先が中国でした。最初は右も左も分からず中国語も全然話せませんでした。それでも留学を終える頃にはそれなりに語学力が身についたのではないかと思います。語学力上達への近道は、やっぱり現地の友達を作ることだと思います。私自身当時国際寮で暮らしていたこともあり、同じく中国語を学んでいる友達には恵まれました。現地生活の長い友達から中国人学生と交流できる場を紹介してもらったり、週末一緒に遊んだりしながら中国語でのコミュニケーションをできるだけ多くとるようにしていました。今はコロナ禍など、現地で友達を作ることが難しい状況もありますが、学校の先生に相談してネイティブスピーカーと交流のできるコミュニティを教えてもらうのも一つの方法だと思います。学んでいる言語を使ってもっと会話したいという気持ちは絶対に語学学習を後押ししてくれるはずです。

私は当時友達との会話で出てきた知らない単語や表現をノートにまとめて単語帳を作っていました。お勧めです。そしてもう1つ、授業で新しく習った単語や表現は恐れずどんどん使うことも大切です。言語は使うことでどんどん自分のものになっていきます。間違えても恥ずかしいことはないですから、勉強したことはすぐ実践してみることでいいと思います。新しい言語を学んで自分の世界を広げることは人生を豊かにしてくれます。是非頑張ってください。

④ 発音に関しては年齢の低い方が有利だとよく聞くがこれは正しいか

【回答一はい】

英語を勉強していた頃に、/r/と/l/の発音が聞き分けられなくて困ったことはありませんか？ 母音についても、日本語の母音が5つなのに対して英語も韓国語もはるかに多くの母音があり、理屈を学んで発音することはかろうじてできても、音の違いを聞き取るのは完璧にはいきません。ところが、小さい時から2言語に触れて育ったバイリンガルは2つの言語に含まれる音（正確には「音素」と言います）を困難なく聞き分けられているように見えます。これはどういうメカニズムなのでしょう。

生後間もない乳幼児が異なる音素を聞き分けられるという研究は発達心理学の分野で繰り返し発表されていて、日本の心理学者の今井（2013）^{注9}でもヘッドターン（首を向けること）という手法が紹介されています。それによると、ヘッドターンでは、たとえば6か月の乳児に/ra/という音をしばらく聞かせて、そのあとに/la/の音に変更した時に、同時に左（あるいは右）方向でおもちゃの動物が太鼓をたたくという楽しいことが起こります。しばらくこれを続けると、幼児は/ra/から/la/（あるいは逆）の音の変化があれば、太鼓の音が聞こえる前におもちゃの方を見る（楽しい動物の太鼓を期待する）ようになります。つまり、音の変化を認識していることが分かるという手法です。この現象については Patricia Kuhl が TED トークとして発表していますし、同じ手法を Janet Werker も YouTube で実際の幼児の実験の様子を公開して示しています^{注10}。このような「変化」を認識している能力をとらえるのに、さらに幼い乳児に対しては、おしゃぶりを吸う強度が変わることで調べる方法もあるようです。

先に言及した Patricia Kuhl によれば、/l/と/r/という2つの音素の聞き分けは、6-8か月の乳児の段階ではアメリカ在住の乳児も日本在住の乳児もまずまず同じように区別ができ両者に程度の差はなかったのですが、10-12か月の乳児になると、アメリカ在住の乳児は区別が上手になり、日本在住の乳児は以前より区別ができなくなったとのこと。Kuhl曰く、いわば、生後半年の子どもはどこで育つことになってもやっていける「世界市民」の状態であり、10-12か月の乳児は自分の住む文化仕様にすでに適応しているのだそうです。ただ、別の実験で、英語環境の9-10.5か月の乳児に、1回あたりほんの20分間12回にわたって中国語に触

れさせたところ、中国語の音素を聞き分ける力が上昇し、中国にいる幼児と同じになったとのことでした。つまり、このような幼い時期であれば、一度「自文化」に適応が決まった聞き分け能力が再度他の言語向けに活性化されるということが分かります。他にも1日1時間の刺激で18週間バイリンガル学習をした子どもは1歳や2歳半でも2つめの言語に対して聞き分け能力の向上効果を示したことを、この YouTube で発表しています。

以上は心理学の分野での研究ですが、第2言語習得を第2言語に触れ始めた年齢との関係で調べる言語習得研究では、移民として国境を越えてやってきた年齢と発音のネイティブらしさの関係を比べ、6歳までに移住してきた人はその居住地の言葉がネイティブ・スピーカーレベルであったとか、いやその分岐点は6歳以前であるなど様々に議論されています。

外国語学習者としては、「何歳になっても自分の母語にはなかった音素を聞き取ることはできるようになる」といった、肯定的な検証結果を聞きたいところですが、一般的には、人間の脳は比較的早い時期に自分の生活に必要な言語に含まれている音素にチューニング（調整）し終わることで言語を習得しやすく効率的に言語処理をするようになるというメカニズムがあって、それは発達という面からやむを得ないことだと言えるでしょう。ですので、残念ながら、確かに新しい言語に存在する音の聞き取りに関して言えば幼児にアドバンテージがあるのは認めざるを得ません。しかしそれでも成人は、音の発生の仕組みについて口や舌や歯の図に基づいてメカニズムを理解するという、子どもにはない能力があります。そうした能力を駆使して自分で新しい音素を作ってみる、また、新しい音素に特化したリスニング教材を使ってみるなどすることによって、次第に慣れていくよう努力してください。

注9：今井むつみ（2013）『ことばの発達の謎を解く』ちくまプリマー新書

注10：Werker, J. (2014). Tuning in to Speech Sounds. YouTube

<https://www.youtube.com/watch?v=WvM5bqUsbu8>

Kuhl, P. K. (2010). 「赤ちゃんは語学の天才」 TEDxRainier

https://www.ted.com/talks/patricia_kuhl_the_linguistic_genius_of_babies?language=ja

Kuhl, P. K. (2020). Neuro Futures: The Baby Brain. BrainMind Summit

<https://www.youtube.com/watch?v=ErPPXfsY6a8>

⑤ 外国語学習において個人差はどのようにして生まれるのか

【回答1ー適性、動機】

個人差の理由として応用言語学であげられているものの一つは**言語学習特性 (aptitude)**です。皆さんは、スポーツ、ダンス、歌など、それぞれの活動に関して、自分とは異なり何の苦もなくすっと上手にできる人を見てうらやましく思った経験はありませんか。筆者も、中学生の時にバスケットボール部に入っていたのですが、同じ時間を使って練習しているのに、ドリブルもシュートも群を抜いてうまい同級生がいて、これは生まれつきの適性なのだと思われ、圧倒的な個人差に脱帽した思いがあります。スポーツ、ダンス、歌などと同様に、外国語学習にもそれぞれ特有の適性、平たく言えば向き不向きがあるのではないかと、それによって同じ時間学習しても個人差が生まれてくるのではないかとすることは長らく議論されてきました。

アメリカで、John Carroll という学者が政府の委託を受けて、集中的な語学トレーニングで成功しそうな人をあらかじめ選別するためのツールを作り 1959 年に発表しました。それが、外国語学習の進捗度の度合いを予測する言語学習特性に関する測定ツールとして有名な、現代語適性テスト (Modern Language Aptitude Test, MLAT) です。テスト自体は5種類の作業から成り立っていますが、大別すると音素に対する感受性、文法に対する感受性、記憶という要素に分けられると言われています。こうした能力が高ければ語学学習は楽に速く進むと考えられます。ただ、こうした資質は先天的なもので全く不変かということ、適性テストのスコアから見る限り言語学習歴に影響されるなど、不変とは言えないという研究結果もあります¹¹。言語学習特性自体の概念や測定ツールを問い直す研究¹²もあります。

しかし、スポーツでオリンピックに出ようというのなら確かに適性は成否に関係してくるでしょうが、皆さんが大学で言語学習をする際には、そこまで適性を心配することは生産的ではありません。自分は適性が低いのではないかと思悩むのに時間を使うのではなく、自分に合った学習方法を考えたり、自分で変えられることを工夫したりして総合的に実力アップを試みましょう。

次に、個人差を生む要因の第2の要素として、**動機づけ**に話をうつしましょう。CAP 生にとっては中国語と韓国語の学習は CAP の履修完了のために不可欠な学習内容ですので、もともと動機づけ、つまりやる気が高いから選んだのだと思われ、CAP 外で複数言語を学んでいる人も、それぞれに明確な理由があって決断したのであろうと想像します。ただ、CAP はこの2か国の文化や歴史を含んで総合的に学ぶプログラムですので、外国語大学の学生のように語学学習自体が好きだから選んだというわけではないという人もいるかもしれません。どういう場合であれ、自分の学習の動機づけについて振り返ってみることで、皆さんの中国語・韓国語学習の際の「やる気」がさらに高いレベルで継続するようになるかもしれません。

動機に関してまず考えられるのは社会的および経済的な要因です。将来の就職のため、より高い給料が得られるようになるために人は有利に働くであろうと予測できる言語を学びます。1つの国の中で生きる少数派言語話者にとって多数派の言語に堪能なのは絶対不可欠なことです。会社や役所は自国内で必要でない言語でもそれを使っている海外の国との交流ができる人を求めていますので、ここでも外国語学習は有益です。

1960年代に、こうした利益を期待するといったタイプの言語学習動機づけをガードナーという心理学者は**道具的動機づけ**と呼び、それに対比して、学習している言語を話す人々や文化に好意を感じその人たちと交流したいからというタイプの動機を**統合的動機づけ**と呼びました。これとかなり平行になる概念に、テストや就職のためにやむを得ないという理由で学習するという**外的動機づけ**と、利害関係にかかわらずそれが楽しくてたまらないからやるという**内的動機づけ**がありますが、この2つは明確に2分できるものではなくて、その間に位置するいくつかの動機があるとする人もいます。

また、人の動機づけの度合いはスタート地点で感じていたレベルがそのままずっと何年も持続するというよりは、学習をしている間に刻々と変遷するものとも言われるようになりました。確かに、小・中学生は、どの教科内容に本質的に興味があるなどと感じる以前に、単にその教科の先生に褒められたからとか、テストの点数が思いのほか良かったからとか、授業内でやったグループ発表が楽しかったからなどといった「ちょっとした」(先生の動機づけの仕掛けを含む)ことでその教科が好きだと言います。このように、社会・経済的なマクロな要因もさることなが

ら、教室内のマイクロなレベルで先生のスキルは生徒のやる気におおいに影響を与えます。

外国語学習動機を長年研究してきたハンガリー人のゾルタン・ドルニェイという学者がいます。この人が『動機づけを高める英語指導ストラテジー35』という本¹³を書いています。英語の先生が生徒のやる気を高めるために、授業前、授業中、授業後にできることが合計 35 あるとし、その詳細を提示している本です。ドルニェイは先生が生徒をやる気にさせる方法として、生徒間、生徒—先生の関係づくりに始まる学習の環境の整備から、学習成果のお手本を見せたり先輩の体験を話してもらって到達目標をイメージさせたり、学習開始後は達成すべきタスクの魅力を高めたり取り組む過程での学習ストラテジーを教えたりすることでやる気を持続させることができると言っています。学習タスクの完成後も肯定的で満足感を高めるようなフィードバックを与えることで動機づけを高めるとよいとしています。

CAP への参加を決めた皆さんは、それを決めた時に明確で強い理由を持っていたはずで、このハンドブックでは、その後の動機づけの維持のため、つまり、刻々と変わりうる状況の中で最初のやる気を保つために参考にしてほしいと考え、これまで動機の話をしてきました。上であげたドルニェイの本は、動機づけのレベルが変わりうることを示しており、それをふまえてとりわけ教師に対して言語学習前、途中、単元などの終了後の全てのプロセスにおいて生徒のやる気を維持し高めるためにできることがあると言っています。ただ、これを学習者自身に置き換えてみれば、自分のやる気と学習成果そのものをうまく自己管理するための**学習ストラテジー**を身につけて活用することが鍵となります。次のセクションであらためてこの学習ストラテジーについて説明します。

【回答2—学習ストラテジー】

どの第2言語習得論の概説書でも、個人差を生む要因の一つとして、適性、動機づけの他に常に学習ストラテジーをあげています¹⁴。学習者が主体的に様々な学習ストラテジーを使えるようになるには、一定の経験や認知能力の成熟度が必要なので、大学生期に外国語学習をする皆さんは非常に有利な立場にいます。

ストラテジー研究でよく知られているオックスフォードという研究者が1990年に発表した本に、6種類のストラテジーがまとめられています

¹⁵。そのうちの3種類は直接ストラテジーと呼ばれ、記憶、認知、(欠けた部分を)補完に関するストラテジーで、言語学習中にそのまま使用できます。これらについては、皆さんはすでに各言語の学習時に自分なりの方法を編み出して使用していると思いますので、ここでは残りの3種類、つまり、間接ストラテジーとしてあげられているものに注目しましょう。

オックスフォードによると、この間接ストラテジー3種類とは、自分の学習を計画し制御する「メタ認知ストラテジー」、自分の学習におけるプラスやマイナスの気分をうまくコントロールするための「情意ストラテジー」、そして、学習に関する他者との関わりを最適なものにするための「社会的ストラテジー」です。これらは、先の動機づけのところで、ドルニェイが先生の側の仕事としてあげた動機づけ向上のための工夫とおおいに連動しています。

まず、メタ認知ストラテジーですが、CAPの場合には、4年間継続するプログラムですので、中国語も韓国語も、1回生からきちんとカリキュラムが組まれていて、目標とする外部試験で合格することが望まれるレベルも提示されています。CAP生はそのルールにのれば自分の計画などいらないと思うかもしれませんが、成績で及第点をとる最低ラインで満足するのではなくて、自分なりの目標を設定し自分の生活の中で学習計画を立てることは学びの成否に大きく影響します。

テストの点が思いのほか悪かった時、発表で失敗した時など、学習の途中でめげたりやる気を失いそうになったりする時がやってきます。CAPの先輩も、3回生時のインタビューの際に、年数が経っても自分がイメージしていたような「べらべら」にはなれずめげていた時に、1回生の時に勉強していた中国語のテキストを見て、こんなに簡単なことをやっていたんだ(=今はずっと上達しているんだ)と気づいたと言っていました。このように自分の成長を振り返る、今の自分と同じ時期に当時の先輩が何を感じていたかを教えてもらい、自分にご褒美をあげるべく中国語・韓国語に関する文化的なイベントを楽しむなど、気持ちが落ち込んだ時には何らかの自分の気分を上向きに変化させる工夫を実行して、落ち込んだままほおっておかないようにしましょう。

情意的ストラテジーは最後の社会的ストラテジーとおおいに関連してきます。CAPでは、1学年18~20名ずつの3か国の学生が3言語話者になろうと切磋琢磨しているのですから、ほどよい少人数でもあり、お互

いに分からない部分を教えあい励ましあうことがしやすい環境にあると言えます。実際、先輩方に話を聞いていると、授業中分からないことについては、3言語を共通言語として持っているからこそ先生よりもむしろ学生間で質問をしあい教えあって理解を進めていったとのことでした。発表準備などの場面や討論、またインフォーマルな対話の中でも、分からないままに置き去りにするような人が出ないように、他者の気持ちを考えて言語選択をしたり言葉の使い方に配慮したりしたとのことでした。これらはとりもなおさず、社会的戦略と呼ばれている工夫です。外国語学習は、ゆるぎない強固な意志を持って1人でするものだというイメージがあります。しかし、本当のところは、自律的に自分の学びを計画しているものの、誰にも不安ややる気の上がり下がりはありません。そうした気分の変化は起こりうると覚悟し、周りの人の助けも得ながらうまくコントロールするのは、言語学習において学問的にも認知されている重要な戦略です。是非このような戦略を認識して自律的に使用していきましょう。

注 11 : Rogers, V., Meara, P., Barnett-Legh, T., Curry, C., & Davie, E. (2017).

Examining the LLAMA aptitude tests. *Journal of the European Second Language Association*, 1(1), 49–60.

注 12 : Meara, P. (2005). *LLAMA Language Aptitude Tests: The Manual* Lognostics.

注 13 : ゴルタン・ドルニェイ (著) 米山朝二/席昭典 (訳) (2005) 『動機づけを高める英語指導戦略35』大修館

注 14 : 個人差を生む要因としては、適性、動機づけ、学習戦略の他にも、年齢、学習スタイル、個性などがあげられることが多いですが、このハンドブックでは読者の関心の強そうな要因と積極的に行使できる要素として主な3点に絞りました。

注 15: Oxford, R. L. (1990). *Language learning strategies: What every teacher should know*. Heinle & Heinle.

コラム：中国語・韓国語の2言語を一緒に学ぶ



2017年度～2021年度
立命館大学文学部教員
山本一

2021年度までのキャンパスアジア・プログラムに参加した学生さんを見る限りでは、どちらかといえば中国・中国語より韓国や朝鮮語に興味がある人が多いです。そんな中で私はどうにかして中国や中国語に興味を持ってもらおうと試行錯誤してきました。授業では私が体験した中国や中国人などについて、良いところも悪いところも包み隠さず伝え、できるだけ生の姿を感じられるようにしてきました。

2言語を同時に学ぶのは大変な部分もありますが、学習方法を工夫することで効率よく勉強することができます。私の授業では、韓国人が中国語を学ぶテキストを利用していました。そのテキストは、中国語の新出単語が韓国語で説明されていますし、本文の訳文は韓国語で書かれています。1つの新出単語を2言語で同時に覚えることができ、韓国語の文章の表現も学ぶことができます。

留学のための語学学習は、スピーキング・リーディングよりもリスニングと単語量が重要だと思います。特に単語は、どこでもいつでも勉強できると思います。たとえば、観光地京都にあふれる中国語や韓国語を目にしたら黙読したり、日常的に目にしたことを外国語に置き換えたりする（「駅に走っている人を見たら、「急ぐ」とは中国語でどう表現するのだろうか」など）だけでも、単語力を向上させることができます。毎分毎秒を留学につなげるよう意識してほしいと思います。

⑥ 1つの言語を学ぶ時にはそれ以外の言語は使わないという〇〇語漬けの方法は有効か

【回答—はい。しかし目的によってはトランス・ランゲージング】

そもそも CAP の場合には同時に中国語と韓国語を（たいていの人間にとっては初修の）外国語として同時に学びますし、3か国の学生が同時に履修する小集団クラスなどでは日本語も使う必要があるでしょうから、〇〇語オンリーというような状況は比較的少ないかもしれません。CAPとは関わりなく2つの外国語を同時履修している人たちも、そのうちの1つの言語を話している国に単独で留学をするのであれば別ですが、日本に在る間は〇〇語漬けの状況はなか作りにくいのが実情でしょう。

筆者は高校の英語教員を3年ほど務めた後、1980年～81年に、アメリカの大学院へ1年半留学しました。生まれて初めての海外体験でしたが、すでに英語教師でもあり日本でできる自分なりの努力の結果ある程度英語力もついていたので、1年半の間ほぼ英語漬けの生活を送りました。アメリカ東海岸の片田舎で日本人は筆者の他には1人しかいないという大学だったという事情に加えて、英語漬けになることが当時の自分の希望でもありました。というのも、それまでは年に数回会う英語指導助手（ALT）相手くらいしか英語を授業外で使うこともなく、英語を使う生活は切望していた環境だったのです。そのおかげで流暢さと語彙・表現が格段に伸びました。

この時の私の留学の場合には、学ぶ内容は基本的に英語で書かれた文書や講義から得るしかない状況でしたし（インターネットももちろんなかった！）、それが理解できるレベルの英語力はかろうじてあったので、聞く、話す、読む、書くという4技能の全てにおいて言語処理のスピードを向上させるには最適でした。しかし外国語学習の状況によっては、必ずしも〇〇語オンリーが最も効率が良いとは言えない場合もあると、昨今多くのバイリンガル教育研究者が指摘しています。

家庭や地域では母語を使い学校教育も母語を基本に学んできた人間にとっては、自分にとって最高の難易度の情報を最速で得られるのは何といっても母語を通してです。外国語を学習する時も、やや込み入った文法ルールを学ぶには母語を介するのが正確ですし、ねらいが言語ではなくて、その言語で文化、歴史、政治、経済など専門の内容を履修する時に

は、しかも、まだ言語能力が大幅に不足している間は、外国語を通して学ぼうとすると読解や語彙のレベルがあまりに低くて時間がかかりすぎます。そういう場合には自分の持っている言語および言語以外のリソースを全て生かし（これをトランス・ランゲージングと呼びます^{注16}）、インターネットを使って両言語で学ぶ内容を検索し、日本語も使って内容を把握しておく、中身の理解も言語の習得も速くなります。もちろん、母語を介して内容が分かったところで満足するのではなくて、それがどのように中国語なり韓国語なりで表現されているのかを、言語学習としてしっかり会得しようという姿勢がなければかえって害にもなりますが、

こうした学習の姿勢や自律的な学習ストラテジーができている人は、DeepLなどの翻訳ソフトもうまく使って、外国語を母語による対訳や、あるいは3言語を対比させることを通して学ぶといった手法をうまく活用することができます。先に言及したスペインのバスク語イマージョンの学校では、スペイン語、バスク語、英語の3言語の語彙を対比させて単語の類似性などを分析させながら一緒に教える場面があり、それが子どもたちの言語習得に役立っているという報告をしています^{注17}。自分の勉強を阻害するような「ズル」に陥らないように気をつけながらも、あらゆる手段で自分の発信力を高めようという自律的な学習を心がけましょう。たとえば、自分の書いた外国語の発表原稿を翻訳ソフトで翻訳させたものと対比して修正したりすれば、今の自分の言語力を1歩前に進める原稿ができるので、それをしっかり覚えて身につけるという方法も有効でしょう。

自分の持つ全ての言語知識や言語以外の知識、使えるツールを総動員して言語学習に生かすとよいということをこれまで説明してきました。ただ、それが自分なりにうまく制御できないと良くない結果も生まれるのでよく注意してください。先輩の中には、一時期、中国に在る時にも韓国語と日本語を多用する習慣がついてしまったというケースがありました。自分の学びは自分で管理し、1つのみの言語の使用を心がける時とトランス・ランゲージングをする時をうまく使い分けることによって自分の到達目標が達成できるようにしましょう。

注 16：トランス・ランゲージングについて日本語で書かれた文献はすでに注 8 で紹介しました。ここでは英語で書かれた論文でこの概念をよく紹

介していると思われるものを2点あげておきます。

García, O., & Li, W. (2014). *Translanguaging: Language, bilingualism and education*. Palgrave Macmillan.

Li, W. (2018). Translanguaging as a practical theory of language. *Applied Linguistics*, 39(1), 9-30. <https://doi.org/10.1093/applin/amx039>

注 17 : Leonet, O., Cenoz, J. & Gorter, D. (2020). Developing morphological awareness across languages: translanguaging pedagogies in third language acquisition, *Language Awareness*, 29(1), 41-59. <https://doi.org/10.1080/09658416.2019.1688338>

⑦ CAP1 期生はトランス・ランゲージングを実際どのように行っていたのか

【回答－授業中、授業準備、課外活動の全てにおいて】

CAP の常設化後の第 1 期生、つまり、2016－2019 年度に立命館大学で学習をした皆さんの先輩から、留学中にどのように 3 言語（＋時々英語）を使っていたのかを聞き取りました。そこでは先輩たちが、3 言語とネット情報、スマートフォン、地図等あらゆる情報ソースを使って積極的に遅く過ごしてきた様子が垣間見られます。トランス・ランゲージングの中には、現地語の能力が高まるにつれて不要になる部分、つまり言語能力上欠けている部分を補填するという機能もありますが、言語的、認知的、社会的に、積極的な使い方もあるので、参考にしてください。

まず、授業中です。授業では、CAP 専用の 2 回生配当科目、CAP 専用の 3 回生配当科目、留学先での大学で一般学生に提供されている現地語での科目という風に履修科目は分かれます。この中で、CAP 専用の科目内では、学生の間で 3 言語（英語を入れると 4 言語）が共通言語になることから、先生の講義の一部が分からないと、隣の席に座っていた人など周りの人とお互い気軽に尋ねあったとのことでした。たとえば中国での授業で、先生が中国語で言い換えるなどして説明して下さるのにそれでもよく理解できず隣の席の人に聞いたところ、日本語もしくは韓国語で説明してもらって即座に解決したので先生が驚かれたというエピソードがありました。

予習段階のトランス・ランゲージングの好例として、湯川・清田 (2021, p.135) に以下の記載があります。

「映画の授業っていうのがあったんですけど。それはどうしても中国語の、中国語の映画やったら中国語がどわーって流れてくるから、全然分かんないんで、その授業が始まる前に、日本語で、なんか、とりあえずその中国語の題で日本語のネットで打ってネタバラって日本語で書いて、それで検索して、ある程度あらずじ掴んでから、映画見て内容を、なんとなく、ああ今このシーンかみたいなの、したりとか。」

韓国語にしる、中国語にしる、言語の学習が目的となっている教科書の場合には、そこに掲載されている読み物や会話はその言語の習熟度レベルに応じて書かれています。したがって、自分の力で読解することが可能であり、さらにそれが求められています。しかし、科目内容が言語の授業ではなく中国文化や歴史などの専門科目になると、どうしても外国人の言語レベルよりはるかに高いレベルの語彙や表現も出てきます。そういう時に、引用した先輩のようなトランス・ランゲージングが威力を発揮します。

学習中のトランス・ランゲージングとしてもう1つ興味深い現象として、中国語習得が目標の学習中に韓国語の勉強をしていたり、英語を勉強する目的の時間に韓国語の復習をしていたりといったようなことが、偶然起こったり自分で意図的に設定したりしたという、同時複数言語を学習する人ならではのエピソードがありました。

以下の発言を見てください。

学生A：あつ、うちも思い出した。韓国で、中国語の検定の準備してて、韓国語の教科書で中国語勉強とかしてたんですけど、でも、私は勉強の助けになったっていうかむしろ、韓国語にめっちゃ困って、韓国語の分からないところを辞書で調べて、韓国語の勉強をしてましたもん。

授業外の友達との歓談の際には、その場にいる人の組み合わせに応じて、誰も除外されることのないように言語を選択しトランス・ランゲージングを行ったとのことでした。

CAPの外では、3言語の共有はできないので、現地語に英語を混ぜたり、観光の際のタクシーの運転手さんに地図を見せて目的地を示したり、伝えたいことが「発音が悪くてどうしても伝わらない」と判断してスマートフォンに発音してもらったなどと、画像やテクノロジーまで総動員して切り抜けていた様子も聞いています。

このようなトランス・ランゲージングは共通言語が複数ある場合に必要に応じて自然に生まれ習熟していくものですが、先輩のエピソードを知っておくと、自分がその状況に置かれた時に戸惑うことなく有効活用できるのではないかと思います。

コラム：人々が共生していくための言葉の力



立命館大学文学部教員
清田 淳子

「キャンパスアジア・プログラム」の学生たちを振り返る時、いくつもの忘れられない出会いや言葉があります。

Aくん、Bくん、Cくんはパイロット事業の1期生で、インタビューへの協力を申し出てくれました。2014年の夏、研究室にやってきたかれらは、初対面とは思えないほど率直に、しかも楽しそうに移動キャンパス中の出来事を次々と語ってくれました。キャンパスアジアの学生間では日本語・中国語・韓国語の3言語が使用可能となりますが、「相手に使う言葉をどのように決めるか」の質問を契機に、＜相手が不十分な日本語で話しかけてきたら？＞という話題になりました。すると、Aくんが「(相手が) 下手な日本語で話しかけてきてくれても、『ほー、ほー、ほんで?』みたいな感じで付き合おうとか、何とか聞き取ってあげようとする」と語り始め、BくんとCくんも当たり前のように深く頷いていました。

かれらが、自分の母語を使って非母語話者とのやりとりを維持し展開していくためのコミュニケーション能力、すなわち、日本語教育で著名な岡崎眸先生が提唱されている「共生言語力」を身につけ始めていることを目の当たりにし、心の底から感嘆するばかりでした。多文化化する社会で人々が共生していくためには、非母語話者の言語能力の向上はもちろん必要ですが、それを待つだけではなく、母語話者の側にも非母語話者とのやりとりを行うための技能や態度が求められます。日本語母語話者どうしのやりとりでは必要のなかった「日本語でのコミュニケーションの仕方」が求められるのです。

以来、キャンパスアジア・プログラムで学ぶ「3か国語」は、私の中では「中国・韓国語・共生言語としての日本語」と位置づけられています。

⑧ ○○語検定で上級とみなされる試験に合格したが、自分がイメージしていたほど自在にしゃべったり使いこなせたりするわけではない。このギャップをどう考えたらいいのだろうか

【回答—標準テストが測れることを理解する】

お金を出して受験すれば自分の言語能力のおおよそのレベルを査定してくれるいわゆる標準テストは、話すことや書くことの調査をテストに盛り込んでいない場合が多々あります。多人数対象のテストなので運用も採点も難しいことがその理由です。それでも、基礎的な語彙・文法の力や聞き取る力、読む力の査定で○○級を合格できたということは、そういう知識や能力を持っているということの指標にはなりますし、なにより学習者にとっては達成感や励みになります。また、基礎的な語彙・文法や聞き取る力、読む力で測ったレベルで、それ以外の話す力、書く力、議論する力を想像することもある程度可能です。

筆者は中高の英語教員になりたい人や英語で応用言語学の様々なテーマについて学びたい人を長年教え、英語教育を専門内容とした英語で行うゼミを開講してきました。その経験から、TOEICの集団テスト（話すことと書くことは含まれていない）でたとえば600点（あるいは700点）をとった人が、どのようなレベルの単語を知っていて何を知らないか、どの程度ゼミ内容が理解できるか、どのくらい発言が可能か、どのようなレベルの英語で論文草稿を書いてくるかがおおよそ想像できます。ですので、標準テストの限界は知りつつも、比較的安価で受験できるテストは一つの目安を示す指標であるととらえて、在学中にできるだけ上級レベルを取得するよう努力することをお勧めします。ただ、すでに述べたように、標準テストでは測定しないスキルがありますので、テストに合格するための学習しかならないのでは不十分です。

さて、それでは、人が自分の母語ではない言語を努力して習得する際に、何ができれば外国語学習者がイメージする「理想の」自分になれたと言えるのでしょうか。言い換えれば、外国語教育がカバーすべき到達目標の包括的なリストなどというものがあるのでしょうか。

実は、欧州評議会（Council of Europe）という、ヨーロッパで一致して人権、民主主義、法の支配の実現に重点を置いて活動している団体がおり、その団体は長年外国語教育についても研究を重ね、2001年に欧州言

語共通参照枠（Common European Framework of Reference for Languages: Learning, Teaching, Assessment、短縮してCEFR）^{注18}という、言語学習・教育・評価を考える際の基本の枠組みを提示しています。2001年に出たCEFR2001は日本の学習指導要領にも大きな影響を与え、今では、ここで提示されている6つのレベルであるA1、A2、B1、B2、C1、C2という用語は、外国語教育関係者で知らない人はいないくらいです。また2020年にはこの補遺版としてCEFR-Companion volume2020（以下、CEFR-CV2020と短縮）が出版され、最新の応用言語学の知見を反映したさらに充実した枠組みを提示しています。

CEFR2001には理論の説明もありますが、200頁を超えるCEFR-CV2020紙面の大半を使っているのは、「～ができる」という、外国語を使ってできることを端的に表した記述文のリストです。世界中のいろいろな状況や条件のもとで様々な年齢層や資質を持った人を対象に外国語教育が行われているので、このリストの中から、自分の学校・プログラムの場合に当てはまるのはこれとこれかなといった風に取り捨選択して活用していくためのものです。これを読んでいると、外国語ができるようになるということは、確かに、こういう場面でこういうことができるということも含むのだなど、今まで明確に意識できていなかったことがはっきり認識できます。

たとえば、「聞くこと」や「読むこと」に関しては、電車の中のアナウンスや標識の理解、家電の説明書から新聞や学術書、文化として楽しむ観劇や小説に至るまであらゆるレベルやジャンルのもを聞いたり読んだりすることを広く含むと想像できます。「話すこと」や「書くこと」もそうした場面で言語を産出する側の作業であると読み替えることができます。しかし、CEFRでの分類では、一方的な独白である話すことや書くことではない、ピンポン玉の往復のように他者とやりとりする言語活動が、「やりとり（インタラクション）」として別立てになっています。

インタラクションには、口頭で行うものとしては、一般的でインフォーマルな会話や、フォーマルな会話、ゴールがあって協同して行うやりとり（2人が離れたところにいる状況で1人が言葉で調理法や家具の組み立てを他方に指示するなど）、お店でほしいサービスや商品を描写して入手する場面、必要な情報を問い合わせる入手したり、インタビューをしたり（されたり）、遠隔での会議等のやりとりなどがあげられています。やりとりはメールや手紙の往復や、メモ、メッセージ、フォームへの記

入といった場面でも行われます。

このような言語活動タスクをもれなくテストに盛り込むことは非現実的です。ですので、標準テストで上級に合格したのに、実際の会話場面で困ってしまった自分がふがないとか、今までの勉強は何だったのかなどと落ち込む必要はありません。人が言語を使う場面は多岐にわたっており、たまたまあなたがその場面でのその活動タスクの練習をしたことがなかっただけです。大学ではアカデミックな発表や討論の場面はカリキュラムの中に多く含まれていますが、多岐にわたる日常の社会的な場面での練習は自分のニーズに合わせて自身で積極的かつ自主的に行うようにしましょう。基礎的な言語構造に関する知識はその土台になりますが、言語活動タスク自体はそれぞれを練習しないとうまくなりません。

CEFR は言語使用者の活動を受容（＝聞く・読むこと）、産出（話す・書くこと）、やりとり、仲介として大別し、その下部項目としておびただしい数の場面や言語活動を想定し、その状況ごとに到達目標を記述した記述文（descriptors）として掲げていますが、それほど、人間が言語を使ってこなす場面は多いのだと認識しましょう。要はそれらを体験して練習しようと取り組むかどうかです。

注 18：CEFR（2001）も CEFR- Companion volume（2020）もこのページからダウンロード可能です。<https://www.coe.int/en/web/common-european-framework-reference-languages/level-descriptions>

コラム：キャンパスアジアでの学びを生かし韓国系企業へ就職



CAP 第 2 期生
今井詩文

私は韓国食品メーカーの日本法人で働いています。私がこの会社に入社しようと思ったのは、キャンパスアジアでの学びがあったからです。

私は大学から中国語と韓国語を始めました。韓国には高校 3 年生の頃から興味を持ち始め、その頃から大学では韓国に留学したいと思い描いていました。入学と同時に始めた言語は、留学を通して日に日にレベルアップしていることを感じていました。現地で日中韓の学生とまた現地の友達や先生と外国語を使って会話することは、もどかしいと感じることも多く決して簡単なことではなかったです。ですが、「相手の立場になって考えてみる」ということを意識し始めた頃に、文化の壁や考え方の壁、さらに言語の壁までが自然と乗り越えられるようになりました。さらに「もっと日中韓を心も距離も近い国にしたい」と思うようになり、より得意であった韓国語を生かそうと、韓国系企業の入社を決めました。

この経験があったから、今の社会人生活を楽しく有意義な毎日にできていると思います。韓国語は日常的に使うので、大学で韓国語を学んでよかったと思う機会が本当に多いです。韓国系企業独特の文化や、親会社への報告業務などの難しさには日々頭を抱えることもありますが、業務を通して学べることが多く、やりがいを感じて仕事ができています。

言語学習や留学は自分の武器を身につけるチャンスです。ぜひ楽しんで取り組んでください！

コラム：韓国・中国籍のお客様とその言語で会話できた日は一日とても幸せな気分



CAP 第1期生
山原萌

私は高校生の時から韓国と中国に興味があり、高校では第2外国語として韓国語を勉強していました。中国語は大学に入ってから勉強し始めましたが、日本語と言語形態が似ている韓国語とは違って全体的に難しいなど感じていた記憶があります（今もそう思っています）。そしてキャンパスアジア・プログラムという、中国と韓国を半年ずつ計2年留学するプログラムに参加しました。私は両言語とも特に話すことがとても苦手でした。なので、留学前は独り言をその言語で言ったりして、話すことに対する恥ずかしさをなくそうと頑張りました。またプログラムの特性上留学中も両国の学生と一緒に過ごしていたので、その学生や留学生と積極的にコミュニケーションをとってアウトプットを行ったのが2言語を同時に学習する上でとても役立ちました。留学終了後 TOEIC の勉強をしていた時に、日本語より先に韓国語で考えていたり、メモを簡体字やハングルでとったりしている自分の姿に気づいた時は自分でもびっくりしました。言語は使わないと上達しないしすぐに忘れてしまいますが、今は海外に行ったり留学に行くことがなかなか難しいので、私は意識的に韓国や中国のドラマを字幕なしで見たり、独り言を口に出したり、とにかくその言語に浸る時間を作るよう努力しています。

今は航空関係の会社で仕事をしています。韓国・中国籍のお客様とその言語で会話できた時や、言語が通じて安心していただけた時はとても嬉しくて、その日一日とても幸せな気分になります。と同時にもっと勉強しないと！ とやる気ももらえます。

2つの言語を同時に学ぶということは難しく、辛く感じることもありますが、自分の好き・できることが増えて自信がつき、韓国語と中国語を勉強していて本当に良かったなと思っています。この経験や結果は一生の宝物になると思います！

⑨ 異言語だけでなく異文化のぶつかりあいの中で、グループワークなどで司会やまとめ役を務めるのは難しい。これは言語力とは別の能力・スキルがいるからではないか

【回答—CEFR ではこれも言語学習の到達目標の範囲内です】

確かに、グループのリーダーとしてまとめ役ができる人は小さい時から母語でそうした役割を担ってきたケースが多いように思えます。ただ、異文化と異言語が関与するコミュニケーションの場では、母語での能力にさらに別の要素が加わることもあり、先の項目で説明した CEFR や CEFR-CV では、司会やまとめ役を異文化異言語を超えて果たす役割も、「仲介 (Mediation)」という言語活動の一部として定義しています。つまり言語学習者が達成すべき目標として掲げているのです。例をあげて説明します。

CAP 生の皆さんは、2回生、3回生と進むにつれて、3か国の学生が集まって3言語を駆使して何らかの課題の達成のために議論をしたり協同作業をしたりといった機会があります。ゴールが設定されていない社交のための会話なら特に困ることはないのですが、限られた時間内に何かを作り出したり解決したりしなければならぬ議論の中では、ぴったりとした表現が思いつかなかったり、相手の言っていることが大まかには分かっていてもこだわっているポイントが理解できなかったりなどといった経験をすることもかもしれません。さらに、人間関係の維持のために礼儀を尽くしてやや婉曲に不賛成の気持ちを表しているのにそれが伝わらない、あるいは相手がどの程度不快感を持っているのかが分からないため終盤では伝えあう手間と時間を使い続けるエネルギーが枯渇してしまい、自分の本意ではないけれど相手が喜ぶ方向で賛同してしまった方が楽だと考え、議論を放棄してしまうような場合も出てくるかもしれません。

相手の頭の中にあって十分に表現されていない概念を、うまく問いを投げかけたり協同したりして引き出す、グループでの議論のリーダーシップをとるという作業を、CEFR-CV では「概念の仲介」と呼んで仲介の言語活動の1種類であるとしています。また、先の例で示したように、複数の文化的な習慣や価値観が存在する中で、対話者相互の意思疎通を誤解なく進めたり、そうした違いが原因で誤解が起こりそうな場合に修復したり、神経を使ったりもめたりしているコミュニケーションの場を

うまく進行させていくといった活動も、「コミュニケーションの仲介」と呼んで、これも仲介の1種類だとしています。

もう1つ、仲介には「テキストの仲介」と呼ばれているタイプの言語活動があります。対象となるテキスト、つまり書かれた文章や耳から聞こえてくる文章を、それが十分に理解できない人のために、その人の目的や状況に応じて、内容を要約したり説明したり翻訳したりすることを、人が遭遇しうる、外国語でこなせなければならない言語活動であるとしています。

このテキストの仲介が通常の言語の産出やインタラクションと異なるのは、後者が自分の考えや思いなどを伝えるのに対して、テキストの仲介は、伝えるべき情報はすでにそこにあるという点です。自分のオリジナルの考えや情報ではないものを、相手に応じてうまく仲介して伝えるというニーズは翻訳家や通訳者でなくても、異言語話者が集まるところではしょっちゅう生まれます。

たとえば筆者が、ロシア語の先生をしている日本人の同僚Aさん、およびアメリカ人の研究仲間Bさんと3人で、ヴラジオストックでロシア料理のレストランに入ったとします。このAさんは筆者と2人の時には、筆者が普段から好きな野菜メニューを中心に日本語でレストランのメニュー内容(=テキスト)を多少の説明をつけて翻訳してくれるでしょうし、3人同時に席についている時には3人全員が理解できる英語で、Bさんの好みを聞きながらメニュー内容を紹介してくれるでしょう。駅や電車の中のアナウンス内容を困っている人に伝えるとか、SDGs(持続可能な開発目標)に興味を持っていると言っていた高校生の妹さんに、○○語でのネット情報にこんな記事があったよ、とかいつまんで教えてあげるといったようなこともテキスト仲介の活動です。

「テキストの仲介」が複数言語が関与する場面で誰でも日常的に起こりうる仲介であり学校の言語教育でも全員に対して簡単に取り入れやすいのに対して、「概念の仲介」は、相手の意見を引き出すという意味で、日常的には親や先生の立場の人が、またサークル活動の先輩が後輩とのミーティングなどで特によく行う活動だと思います。これは、もう1つの「コミュニケーションの仲介」と相まって、CAPや留学生との交流を求めて積極的に学ぶ大学生だからこそ経験できる、鍛錬する価値のある言語活動であると思います。もちろん、こうした仲介活動は日本語を母語とする日本人どうしの間でも起こり得ますが、ネイティブ・スピー

カーレベルとは言えない制限のある言語力と、十分には認識できていないお互いの文化が関与してくる異言語・異文化が交錯する場面では、一層ハードルが高く、学生時代に経験しておくことも役に立ちます。このような「仲介体験」を経たことや、その中で困難にぶち当たったことがあるという「免疫」をしっかりと獲得しておくことが卒業後、アジアや世界の問題解決の担い手になるための土台となると確信しています。

⑩ 外国語で内容を学ぶ教授法は一般的か

【回答—はい情報の直輸入のため、あるいは効率的な外国語教授法として】

CAP の履修生は初級・中級レベルの段階であるにもかかわらず、中国語や韓国語を教授媒介言語として、歴史や文化などの専門分野の科目をその専門家から学びます。また、CAP 外の多言語学習者の中にもそのような経験をする人がいるでしょう。皆さんは小学校から 8 年間もの長い間、英語を学習してきましたが、その授業では単元のテーマがあってもそれは言語学習のツールとして扱われ、そのテーマの内容に関する分析や応用などが評価で問われることは稀だったのではないのでしょうか。つまり、あくまで英語授業は英語という言葉学ぶことが中心もしくは全てだったのではありませんか。このような英語学習経験と引き比べると、初級や中級レベルにおいて外国語で専門内容を学ぶ科目を経験できることに、驚きや戸惑いがあるかもしれません。この項では、自分の母語ではない言語で語学以外の専門内容を学ぶことが意外にもあちこちで行われていることを説明します。外国語の仕組みを学ぶことと外国語で専門を学ぶことの両方の意義を理解して学び方に生かしていただきたいと思います。

外国語で専門内容を学ぶという現象は、母語で書かれた教科書や教える人材がなく、教わる側はその外国語に堪能な場合に起こります。留学して留学先の現地語で学ぶ場合もこの範ちゅうに入ります。自分の生まれた国にいるにもかかわらず、奈良・平安時代に高僧が中国語で仏教を学んだり、明治時代に海軍の知識をイギリス人講師から英語で、陸軍の知識をドイツ人講師からドイツ語で学んだりした歴史があるのもこの一例です¹⁹。アイスランドなど人口の少ない国の高等教育で英語で書かれた教科書を使うのも同じ理由です。

他方、母語での教育が十分に可能なのにあえて外国語で専門内容を教えるという教育を実施する場合があります。それはその外国語（世界的に実施されているのは英語）の習熟度を上げることが目的ですので、明治時代の軍隊の士官候補生が外国語を通してしか必要な知識や訓練を得ることができなかったのとは全く状況が異なります。

イギリスの旧植民地では行政機関での業務に加えて高等教育でも英語が使われてきました。今ではそうした国以外でも世界のグローバル化に

影響され、その国で生まれ育った学生を主な受講対象としているにもかかわらず英語で授業をするという英語開講科目（English-Medium Instruction、短縮して EMI）が数多く開講されています。また、そのような EMI 科目だけでカリキュラムを構成するプログラムもあります。（EMI 科目という場合には、英語の授業を英語で教えることは含まれません。あくまで言語以外の専門科目を英語で教えることを指します。）

大学生にとって英語を自在に使いこなせることはいろんな面でメリットとなりますし、大学にとっても学生や教授陣が自国にいながらにして国際交流ができるのは素晴らしいことです。立命館大学でも 3 つのキャンパスに EMI のみで卒業単位を全てそろえることのできるプログラムがありますし、その他にも多くの学部・学科・専攻のカリキュラムの中で選択的に（あるいは一部必修科目として）EMI を実施しています。もちろん、地域や大学によっては、英語力が低い学生に強いストレスになったり学習のレベルの低下をもたらすなどの問題や、逆にヨーロッパの小国の場合には自国の言語が高等教育での居場所をなくしてしまうのではないかと危惧するなど、EMI の運用の仕方を始め多くの課題があることは事実です。

このような試みの主に初等・中等教育版として、ヨーロッパでは内容言語統合型学習（Content and Language Integrated Learning、CLIL）が盛んに行われています。これは名前のとおり、教科内容を教えることと言語を教えることの二兎を追うという教授法です。分かりやすい例としては、ドイツ人母語話者が通うごく一般的な高校であるにも関わらず、たとえば歴史の先生が英語が堪能で、自分の歴史の授業を英語で教えるが、英語力の向上についても指導と評価の対象とするといった例です。CLIL も基本的には言語の授業の中にちょっと文化的要素を入れるといった語学授業ではなくて、理科なり社会なり、専門科目の先生が担当する授業を英語で行う場合を指します²⁰。

EMI と異なり、CLIL の方は年齢層が低いので生徒の外国語能力が低いのと、EMI が専門内容に関する到達目標のみを評価対象として設定しているのに対して、CLIL は言語力の向上も評価対象となっているので、授業時間の使い方や配慮事項が変わってきます。担当教員は外国語教員としての専門性と教科内容の専門性の両方を兼ね備えていなければならないということになります。実際これは非常に高度なことで、もともと CLIL の定義に幅があることから、現実の、言語と専門科目の評価の割合など

はケースによって大きく異なるようです。

筆者も長年、1 回生（およびそれ以上の学年も対象）の後期配当科目で「マルチリンガリズム概論」という EMI 科目を担当していました。年によって 30—80 名が履修する講義科目でした。大学の科目であり、英語に興味のある学生の集まる専攻ではありましたが、1 回生が多く履修する科目なので、英語力不足の学生がいることを前提としてかなり多くの工夫をしました。しかし、英語力向上を到達目標として掲げる CLIL としてではなく EMI としての科目なので、記述式の間接テストと期末テストにおいて、英語の良し悪しは評価の対象にせず、問いに対する答えがきちんと書いているかどうかを評価しました。テストの問題は英語で書かれていましたが、答えは日本語でも英語でもよいとしました。教科書は持ち込み可なので、教科書の中の文章の意味が完全には分かっていないのに、問いと関連のあるのはこのあたりであろうと丸写しをするといったケースがために見られるが、そんなことをしても点数はつかないから、むしろ自分が答えであると確信が持てる文章を日本語でも英語でもよいから書きなさいと指示しました。

英語開講に限らず、中国語開講、韓国語開講、〇〇語開講の専攻専門の授業の場合、教える側は言語への配慮と内容に関する目標設定を明確に学生に伝える必要があります。他方で、学生さんの側も、専門科目の場合には本当に自分の研究発表が内容的に指定された要件を満たし価値のある中身になっているかどうかを自問するようにしましょう。逆に、履修している科目が〇〇語という言語の習得が目的になっている授業の場合、たとえトランス・ランゲージングを使って発表や作文内容としては高度になったとしても、本当にその中身が自分の使いこなせる語彙や表現となっているかを確認しましょう。今回の発表のために辞書や翻訳ソフトで学んだ新たな単語については、典型的な語義だけでなく、類似語とのニュアンスの違い、文法ルール、コロケーションなどもきちんと確かめましょう。こうした確認をする中で、自分の発表原稿が、自分が使いこなせる、十分なじんだ単語や表現から成り立っているかどうかを吟味するようにしましょう。せっかく先生が二兎を追う高度な教授法にチャレンジしてくださっているのですから、学習者の側もそれを十分に生かすべく取り組んでください。

注 19：司馬遼太郎の小説『坂の上の雲』がNHKによって2009年から2011年にかけて放映されましたが、ここではそのような明治期のエリートが外国語で必要なことを学んでいる姿が描かれています。

注 20：ただ、小学校の先生は全教科を教える場合が多いので、その先生が〇〇科の専門だとは言いきく、日本では、英語授業の中で何等かの教科や「総合」といった領域で扱いそうなテーマを少し扱えばそれを CLIL と呼んでいるケースもあり、かなり定義が曖昧です。

⑪ そもそも複数の言語を学ぶことの利点は何か

【回答—文化的、認知的、社会的能力の向上およびキャリア】

母語以外にいくつもの言語を学ぼうと決意し日々努力している皆さんは、自分で複数言語話者になることの意義を十分に感じたので履修を決めたのだと思いますが、学習の過程では、時にその判断を多角的に後押ししてもらいたい、さらに自分の決断に対する自信を深めたいと願う場合があるかと思います。ここではそうした場合の応援の意味を込めて、個人にとっての複数言語を学ぶことの意義を考えてみます。

バイリンガル教育の専門家でも包括的な概説書を発表しているコリン・ベーカーという人がいます。この人の共著書でバイリンガル教育についての概説書の7版 (Baker & Wright, 2021) ^{注21} の第6章の中で、個人にとっての複数言語学習の理由を4つあげています。

第1に Baker らがあげているのは、文化的認識の向上です。本を読んで異文化を学んだり、通訳や相手の母語ではない言語を介して交流をしたりすることでも学べることはありますが、その国（地域）の文化と密接に結びついた言語を知りその言語でコミュニケーションをとるからこそ学べるものが多々あります。たとえば、日本語は「うち、そと」という区分をする文化を持っているので、自分の上司のことで社外の人と話している時には、「弊社の田中が申しますには」などと上司を呼びすてにして相手に対してへりくだる表現を使用します。それに対して韓国語では自分の身内である（たとえば）祖父の言動に対して「私の祖父がおっしゃるには」といった風に、年長者への敬意の方を優先します。あらゆる文章の動詞部に年長者への敬意を表す助動詞が入る言語を話していると、敬意も日常的に確認され維持されるのではないかと思います。

第2にあげられているのは、数学、科学、歴史など他の教科と同様に、言語学習はその記憶、分析、仮説検証などの語学学習独特の作業に従事することで、認知発達を促すという理由です。確かに、母語しか扱わない時には考えられないような分析的な思考を2言語以上になると強いられることは多々あります。各言語で意味の違いを生む音素がいろいろあるのは常に集中力を要しますし、動詞部を見ても、出来事が起こった時や状態の時間情報を述語動詞部に反映するにも、各言語でいろんな過去形があったり、過去時制を示す手がかりが極端に少なかったりしますので、「曖

昧」な言語から厳格な言語への置き換えをする際には1言語しか使っていなかった時よりさらに分析的にその文章の意味を考えなければなりません。時制に限らず統語法の面でも、日本語は主語をなるべく省く言語ですが、そうなる時に曖昧な文も出現し、これは通訳（翻訳）不可能だからもっと明解な文を書かなくてはと思うようになります。つまり言語や言語に盛り込む概念をより深く明確に認識する力が身につきます。

第3の理由として Baker らは、社会的な認識や自信が高まると言っています。先の⑨の項目で、異文化異言語が関与する場で、「テキストの仲介」や、参加者から概念を引き出す「概念の仲介」、および気まづくなった場でも目的達成のために文化的誤解などを修復することを含めて「コミュニケーションの仲介」をすることが複数言語習得の達成目標であると CEFR-CV では認識されていて、そのねらいを描写した記述文まで提示されていることを紹介しました。会話（書き言葉でのやりとりも含め）に参加している人の、言語能力による誤解、理解の欠如に気を配り、十分に参加できていない人には発言を促し、必要に応じて文化的な情報を提供することで誤解やトラブルを修復するという、異言語コミュニケーション体験ができるのは、複数の言語を知っているからです。

これも Baker らの本の第7章に記載されている例ですが、バイリンガルの子どもはモノリンガルの子どもに比べて対話の中の手がかりにより敏感に反応するということが報告されています。たとえば対話調査の中で調査者である相手が（わざと）間違えたことを言った時にすぐにそれを訂正するなど、正しい確認や修復がうまくできたという研究報告があります。バイリンガルが、コミュニケーションの人間社会における役割や機能について、日常的により注意深くならざるを得ないことの結果ではないかと考えられています。

言語的、文化的、日常生活の知識の面で、知っていることがまちまちな多様性（ダイバーシティ）が存在するところでのコミュニケーションは、ややもすると配慮、説明、確認が頻繁に必要となる、時間と労力のかかるコミュニケーションです。しかしそれを経験すれば、母語話者相手であっても相手にとって心地よい信頼のおけるコミュニケーションをとることができるに違いありません。標準テストの点数などのように明確に数値などの形で皆さんに提示されるメリットではありませんが、これこそ、ダイバーシティ（多様性）の中でインクルージョン、つまり誰も排除しないコミュニケーションという意味で、グローバル化に必須の

スキルではないでしょうか。

第4番目の理由としてペーカーがあげているのは、就職などのキャリアにおけるメリットです。これは言わずもがなの利点なので、これ以上の説明は省きます。

注 21 : Baker, C. & Wright, W. E. (2021). *Foundations of bilingual education and bilingualism 7th edition*. Multilingual Matters.

コラム：他者理解の大きな向上をもたらした2言語2文化学習



CAP 第1期生
袴田媛香

私は大学入学後に韓国語・中国語ともに初修の外国語として勉強を始めたので、留学1年目の初めはもちろん何を言っているのか全く分からない状態で苦労の連続でした。中国での留学が半年経ちようやく耳が慣れてきたと思う頃に次は韓国留学が始まり、生活環境も言葉も変わることにも頭もついていくのに必死でした。しかし、母語以外の言葉を学んだことで、私は他者理解力が大きく向上したと思います。2年間の留学生活で、言葉を知らなければ会うことすらできなかった方との出会いがたくさんありました。その中で自分とは異なる価値観を発見しました。時に文化や歴史の違いに傷つき悩むこともありましたが、言葉や文化が違うから考えも違うのは当たり前だと思い、まずは受け入れてみることにしました。今までは自分とは異なることや考えに対して嫌悪感を抱くこともあり避けていましたが、新しいことを知れば知るほどより柔軟に物事を受け入れる力が身につきました。

この受け入れる力は現職に大きな影響を与えています。日々たくさんのお客様と接し、お客様視点のサービスを心がけていますが、自分とは違う考え方のお客様も多くいらっしゃいます。その中でまずお客様の考えを受け入れることがとても大切になります。言葉や文化、考えが全く一緒の人はいないと心得て、まずは他者に関心を持ち、その人を受け入れる力はCAPに参加できたからこそ身につけられたと思います。

大学入学前には、中国と韓国に留学するとは全く想像もしていませんでした。様々なきっかけが重なりこのプログラムに参加することになりましたが、自分の決意を褒めてあげたいと思うほどたくさんの学びや成長を感じられました。どちらの言葉も学ぶことは時に辛く、難しいと感じることもあると思いますが、私は外国語を「全く知らない」と「少しでも知っている」との間には、自分の今後の考え方や人生を左右する非常に大きな差があると思います。このプログラムに参加される方は、昨今の新型コロナウイルスの影響でたくさんの困難もあると思いますが、与えられた機会を存分に楽しんでください。応援しています！

⑫ ICT（情報通信技術）の発達は外国語教育・学習に大きな変化をもたらしたか

【回答—部分的には変化している】

大学では小・中・高校よりもICT環境が整っており学習者もすでにスマートフォン、タブレット、ノートパソコンなどを持っているので、皆さんはすでに大学での外国語授業や自主的な学習にこれらのICTをツールとして活用していることと想像します。したがってこの項目に関しては、皆さんの明日の学習方法への助言というよりは、焦点を広げて一般的な学校外国語教育とICTとの関係を参考までにまとめることとします。

2020年からのコロナ禍への対応は言うまでもなく、それ以前より世界中でICTを外国語教育・学習に取り入れようとする動きは盛んで、その効果についての検証も進められてきました。1件の研究結果のみに頼るのではなく、共通の問いを扱った研究を数多くまとめて系統的に展望する「メタ分析」という研究方法があります。2018年以降に発表されているICTの効果に関するメタ分析の論文²²によれば、伝統的な方法での教育・学習に比べて効果があるという結論を出しています。さらに詳細な傾向を提示している論文では、初等・中等教育よりも高等教育（大学以上）の方がさらに効果的であるとか、デスクトップパソコン、ノートパソコン、タブレット型パソコンよりもスマートフォンの方が効果的であったという傾向もあるようです²³。

上記のまとめは、英語で書かれた学術論文を対象にした世界的な傾向ですので、視点を日本に向けて、外国語教員どうしの交流や研修会などを通して見た印象についてまとめてみます。

③の「外国語学習に秘訣はあるか」(p.11)の項目で、インプット、アウトプット、フォームへのこだわり、全資源の活用が不可欠であることを述べました。その項目ごとにICTの活用を考えてみましょう。

まず、インプットに関しては、言語教材として活用できるものはインターネット上にあふれています。高校生や大学生はすでに母語で多くの知識や技能を持っています。したがってこうした学習者は「全資源の活用」が効果的に活用できるので、インターネット上の母語や外国語のインプットが加工を経なくてもかなり理解可能で、情報がそのまま言語教材として役に立ちます。ネット上の情報がまだそのままでは難し過ぎる

場合には、学校教育では先生がその外国語での情報に注をつけたり字幕をつけたり、短く切って理解しやすいように編集したりしています。

アウトプットに関しては、今まで授業中や休み時間を使って1人ずつ、あるいはペアごとに発表のチェックや会話練習および会話テストの実施をしていたのが、生徒が自分であるいは相互に録画しそれを指定のサイトにアップロードするとか、録画を保存すると保存されたファイルが直接先生のもとに届くシステムを使う（例: Flipgrid）などといった学校の実践をよく聞きます。手軽に提出させることができ授業時間を多く割かなくてもよいので、気軽に発表や会話・討論の課題に取り組みせることができます。

アウトプットの中でも会話・討論のようなやりとりには相手がいますが、授業で同室にいる人以外のひととのZoomなどのリアルタイムで話しあえるサービスを使えば空間を超えて（時差は超えるのに工夫はありますが）交流することができるので、高校生、大学生の協同講義やプロジェクト、その下準備のための打ち合わせなどで空間を超えてやりとりを行う教育実践も耳にします。

文法を含むフォームへのこだわりについて、特にICTをうまく活用して対面授業ではできなかったことをしていると感じた例にはまだ遭遇していません。

言語以外の、写真、絵、図などの情報と組みあわせて「全情報の活用」をしてやりとりをするにも、ICTを使えば、簡単に提示できます。

このように、ICTを使えば手軽に授業内外で豊富なインプットとアウトプットの機会を得ることが可能になり、特にアウトプットについては、個人だけでなく、グループで1つの発表スライドやレポートを作る際にも、クラウドにのせた共有ファイル上で作業ができ、作業をする学習者は空間を超えてやりとりもできるという大きな利点があります。

ただ、このようなICTの活用には、まず1つ目に、学習者と指導者双方に一定以上のICTのスキルが必要なので、大学はともかく、初等・中等学校においては学校ごとに実践の差があります。また、2つ目に、外国語の授業には、学習者自身が伝えたい意味のやりとりが不可欠であって、それを実現するために様々な興味をそそるタスクを取り入れなければならないと授業者が考えているかどうかによって、ICTの強みを生かせるかどうか分かります。たとえ学習者全員にタブレット端末を持たせていても、外国語授業が伝統的な文法訳読方式ならば、ICTツールは使ったとし

でも、単語ドリルか、発音練習のツールとして活用されるだけです。確かにそれも個別練習を促す意味ではよい使い方ではありますが、「ICT が外国語教育・学習を変えた」というほどの変化ではありません。テーブルレコーダー、CD プレイヤーなどと同じで、コンピュータも道具ですから、それを、どう活用するかは指導者の外国語教育に関するビリーフ（信念、考え方）によります。そのビリーフがコミュニケーションを重視したものであれば、以前は想像すらできなかったような学習者間の交流やアウトプットが可能になることから、活動の幅が大きく広がることになりま

注22 : Chang, M.-M., & Hung, H.-T. (2019). Effects of Technology-Enhanced Language Learning on Second Language Acquisition: A Meta-Analysis. *Educational Technology & Society*, 22 (4), 1-17.

Persson, V, & Nouri, J. (2018). A Systematic Review of Second Language Learning with Mobile Technologies
<https://doi.org/10.3991/ijet.v13i02.8094>

注23 : Chang, M.-M., & Hung, H.-T. (2019). Effects of Technology-Enhanced Language Learning on Second Language Acquisition: A Meta-Analysis. *Educational Technology & Society*, 22 (4), 1-17.

コラム：私のオンライン留学



CAP 第4期生
菅澤夢乃

私は1年間オンライン留学を経験しました。

オンライン授業では、外国の先生やクラスメイトとも画面越しにコミュニケーションをとらなければいけません。特にグループワークでは、自分の伝えたいことが伝わらず、相手の気持ちも分からず苦労した記憶があります。

そこで私が意識したことは、①積極的な行動、②音声・テキストコミュニケーションの使い分けです。オンラインコミュニケーションでは正確な情報の共有が必要だと思います。しかし、対面でのコミュニケーションとは異なり、相手の状況が読みづらい上に時間がかかります。そのため、状況によって声とテキストを使い分けたり、積極的に発言やリアクションをしたりすることを心がけていました。初めは慣れない方法に戸惑いましたが、柔軟に対応していくことでコミュニケーションの活性化につながったと考えています。

オンライン留学に対して不安を抱く方も多いと思いますが、実際にやってみて、意欲さえあればしっかり学べる環境だと思いました。私も最初は不安でしたが、やらない後悔はしたくないと思いオンライン留学にチャレンジしました。留学を終えた今では達成感や自身の成長も感じており、コロナ禍における学びの方法として最善の選択をしたと考えています。

第 II 部 複言語学習の実践—CAP1 期生の学習記録から

第 II 部では、これまでに発表した CAP の 1 期生の言語習得や言語使用に関する論文の中から、皆さんにとって参考になるかもしれないと思われる部分だけを抜粋して紹介します。

パイロット実践を踏まえて常設化された CAP の第 1 期生として学んだグループは 2016 年度から 2019 年度に在学していました。この人たちについての言語に関する研究は、以下の 3 本の論文として発表しています。まず、移動キャンパスの 1 年目が過ぎた時（1 期生が 2 回生を終了した時）に行った言語能力と言語使用状況に関する量的な分析を湯川・清田（2019）として、また、同じ手法で移動キャンパスの 2 年目（1 期生が 3 回生を終了した時）に行った分析結果を湯川・清田（2020）として発表しました。さらに、第 I 部でも述べた学習者の学習ストラテジーをインタビューで聞き取り、トランス・ランゲージングの視点から質的に分析したものに湯川・清田（2021）があります^{註 24}。研究内容全体に興味のある方はそちらを読んでください。

【言語力について】

常設化 CAP の第 1 期生は最終的に 14 名がプログラムの全カリキュラムを終了しました。うち、韓国語の標準テストである TOPIK（1 級から 6 級、6 級が最上級、聞き取り、書き取り、読解）については 6 級に 3 名、5 級に 5 名が、卒業までに合格しました。中国語についても HSK と呼ばれる中国語能力試験（1 級から 6 級まで、6 級が最上級、筆記 HSK はリスニング、読解、作文）において、6 級に 1 名、5 級に 12 名が合格しました。あとで述べる自己評価において、3 回生終了段階で中国語は全領域においてレベル 1 未満であると厳しい評価を下した 2 人のうちの 1 人も、HSK5 級に合格しています。（もう 1 人は未受験。）立命館大学の CAP でこうしたテストの受験は任意となっているため未受験の学生がいますが、学生の話によると、そうした人たちも 5 級レベルの実力はあるとのことでした。

ただ、第 I 部の⑧「〇〇語検定で上級とみなされる試験に合格したが、自分がイメージしていたほど自在にしゃべったり使いこなせたりするわけではない。このギャップをどう考えたらいいのだろうか」（p.30）で、標準テストの結果と自分の「外国語でできること」への自信との間にギャップは生じてしまうと説明しましたように、日常生活や留学中の学業

の中で、標準テストでは高い級を合格したけれどあれやこれができないなどといった思いがどうしても生まれます。

そこで、筆者らは、CAP 履修生自身が自分の言語力について、⑧で言及した CEFR（欧州言語共通参照枠）に基づきつつ、CAP 生の生活にふさわしいようにと考えて新たに作成した Can-Do 記述文を提示しました。読むこと、聞くこと、書くこと、話すこと、やりとりをすることの 5 領域に分けて、それぞれについて自分が韓国語や中国語でその記述文で書かれたことをどの程度できると思うか、自己評価をしてもらいました。5 領域の Can-Do 記述文は CEFR に準じてレベル 1 からレベル 6 とし、レベル 6 が CAP 生の学業生活や日常生活においてあらゆることが苦もなくできるというレベルとしました。5 領域のうちの「やりとり」についての記述文を表 1 に示します。S1 と S2 が初級、S3 と S4 が中級、S5 と S6 が上級レベルと言えます。

表 1 言語能力自己評価 話すこと - やりとり（日本人学生用）

言語能力記述文（話すこと - やりとり）	
S1	自分のことや日常生活のことについて決まり文句や基礎的な語句などを用いてやりとりができる
S2	よく遭遇する日常会話場面であれば、基礎的な語句や文を使ってやりとりができる
S3	日常生活や自分の関心のあるトピックについて、自分の意見を述べたり、質問をしたり、答えたりできる
S4	日常生活や自分の関心のある事柄以外のトピックについても、学術的に複雑な内容でなければ、ある程度意見をやりとりすることができる。
S5	学術的な場面および日常生活上のあらゆる場面で、さほど苦勞することなく、文法的にはほぼ正確に発話ができ、必要に応じて、相手を説得するなどの対話上の目的を達成することができる
S6	学術的な場面および日常生活上のあらゆる場面で、苦勞することなく、正確かつ流暢に発言ができ、相手を説得したり問題を解決したりなどの対話上設定した目的が常に十分達成できる

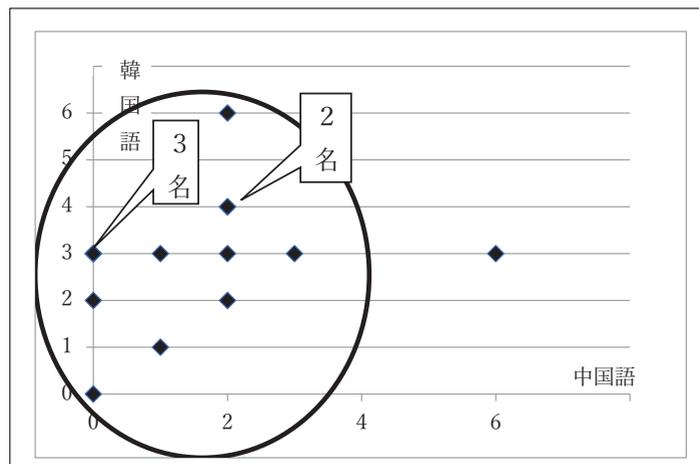
湯川・清田（2020）の表 4 の再掲載

2 回生終了時の段階での中国語と韓国語の自己評価を個人ごとにまとめたものが図 1 です。

図 1 を見ると、全体的に左に偏っています。つまり、2 回生終了時点で韓国語は初級、中級レベルに広がっていて、1 名上級だと答えた人もいるのに対して、中国語に関しては 1 名を除くとおおむね初級レベルの

到達度であることが分かります。

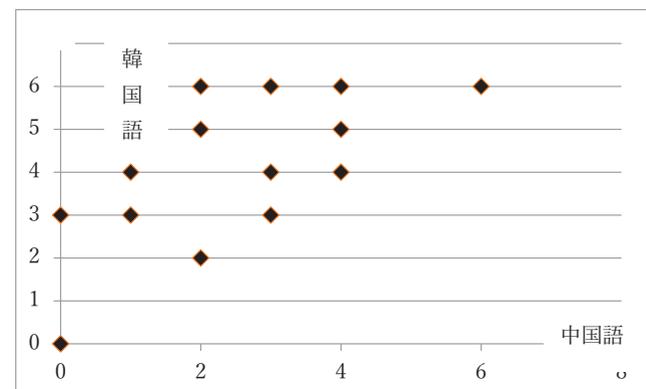
図1 日本人2回生次「やりとり」力(湯川・清田 (2020) 図1の再掲載)



それからさらに1年たち、3回生時終了時には図2に変化しています。

3回生終了時の中国語・韓国語の自己評価を表した図2を見ると、今度は左寄りではなく、右上方向に全体的に移動しています。つまり、韓国語中国語の両方ともが中級レベルだと自己査定する人がほとんどだということを示しています。中には2言語ともに上級のレベル6だと自己査定する人が1名いたり、逆に両方ともレベル0だ(=レベル1の記述文に書かれたことすらできない)とする人もいます。ここに例示したのは「やりとり」についての能力ですが、他の4領域(読むこと、聞くこと、書くこと、発表)についても自己査定平均はほぼ中級4レベル程度となっています。

図2 日本人3回生次「やりとり」力(湯川・清田 (2020) 図2の再掲載)



大学には卒業に必須の科目や必要単位数がありますが、それを除くと自立的、自主的に学ぶところなので、同じプログラムを履修しても大きなヴァリエーションが出てきます。個人差については第1部の⑤「外国語学習において個人差はどのようにして生まれるのか」でお話ししたとおりです。自分の言語学習のマネジメントは自分で行き、できるだけ、上の図の右上の方に位置できるよう頑張ってください。

【言語の使用状況について】

次に、3言語の使用状況について見てみましょう。⑥の「1つの言語を学ぶ時にはそれ以外の言語は使わないという〇〇語漬けの方法は有効か」(p.24)のところでもCAPの先輩たちのトランス・ランゲージングの様子をお伝えしましたように、3言語も(英語が加わると4言語)共通に使える可能性のある言語があると、いつ何語を使うかについての個人の判断は様々です。大学の方針としては、留学中は現地の言語を使いましょうということになっていますが、授業中や現地で先生と話す場合はともかく、友達と歓談している場合はどこの国の人とよく一緒にいるかやその相手の言語力との組み合わせなどによって使用言語は決まってきます。

表2はそうした言語使用について8つの場面を示し、その時にどの言語をどの程度使っているのかをCAP第1期生に尋ねた時の質問項目です。

表2 言語使用 質問紙 (湯川・清田 (2019) の表4を再掲載)

場面	A 滞在 国の 言語 ^注	B 自分 の 母語	C それ 以外の 言語
1 ①大学の演習で3か国の学生から成るグループで討論することがありましたか。(あった・なかった) ②「あった」と答えた方は、その時、何語をどんな割合で使いましたか。			
2 大学で、休憩時間に友達と話す時、何語をどんな割合で使いましたか。			
3 自分と母語を共通にする教職員と話す時、何語をどんな割合で使いましたか。			
4 自分と母語を共通にしない教職員と話す時、何語をどれだけの割合で使いましたか。			
5 ①授業外の時間に、発表の準備のために議論することがありましたか。(あった・なかった) ②「あった」と答えた方は、その時、何語をどんな割合で使いましたか。			
6 ①授業外の時間に、深刻な話題で話し合いをすることがありましたか。(あった・なかった) ②「あった」と答えた方は、その時、何語をどんな割合で使いましたか。			
7 授業外の時間に、雑談などをすることがありましたか。(あった・なかった) ②「あった」と答えた方は、その時、何語をどんな割合で使いましたか。			
8 キャンパスでも寮でもない滞在国のどこかで話す時、何語をどんな割合で使いましたか。			

注 記入に関しては、A,B,Cの合計が100%になるようにそれぞれの割合を%で書くよう指示した。

表3がその結果です。それぞれの場面で現地語を50%以上使っている場合に網掛けを施してあります。日本人学生14名は5名と9名のグループに分かれてキャンパスを移動していますので、グループごとに結果を出しています。これによると、現地語を最も多く使っているのは、韓国先回りグループ(9名)が韓国にいる時であるということが分かります。ところがこのグループが中国にいる時には、3か国語の学生が集まる演習の授業においてすら、韓国語と母語である日本語を多用し現地語である中国語をあまり使っていません。どうも相対的に韓国語が強くなりすぎて中国語を使用しづらくなった様子がうかがえます。

中国先回りのグループ(5名)については、逆に中国にいる時の現地語

使用が高いのですが、韓国にいる時も、少なくとも3か国の学生が集まる演習授業の場面では韓国語を主に使っていることが分かります。

以上のデータから、能力があっても使用しないと言語運用面での能力は伸びませんし自信も生まれないので、基本ルールとして、それぞれの場面でできるだけ留学して滞在している国の言語を使用することが重要であると考えます。

表3 2018年度日本人学生14名の言語使用(%)

	1. 3 か 国 学 生 演 習	2. 休 憩 時 間	3. 教 職 員 同 国 人	4. 教 職 員 異 国 人	5. 授 業 外 準 備	6. 授 業 外 議 論	7. 授 業 外 雑 談	8. 大 学 外 現 地	
中 国 先 回 り 組 前 期 5 名	・滞在国言語 (中国語)	62.0	2.0	45.0	87.0	32.0	0.0	12.0	36.0
	・母語	19.0	52.0	55.0	5.0	29.0	23.3	48.0	52.0
	・その他言語	19.0	46.0	0.0	8.0	39.0	76.7	40.0	12.0
中 国 先 回 り 組 後 期 5 名	・滞在国言語 (韓国語)	83.0	21.0	29.0	80.0	60.0	35.0	25.0	55.0
	・母語	11.0	61.0	71.0	19.0	25.0	40.0	65.0	28.0
	・その他言語	6.0	18.0	0.0	1.0	15.0	25.0	10.0	17.0
韓 国 先 回 り 組 前 期 9 名	・滞在国言語 (韓国語)	84.7	49.4	8.9	93.9	87.8	88.8	52.8	73.3
	・母語	13.1	45.6	91.1	6.1	8.9	10.0	40.6	25.0
	・その他言語	2.2	5.0	0.0	0.0	3.3	1.3	5.6	1.7
韓 国 先 回 り 組 後 期 9 名	・滞在国言語 (中国語)	16.7	14.4	10.0	52.8	25.7	0.0	13.8	52.8
	・母語	48.3	53.9	83.3	23.9	31.4	40.0	36.3	32.2
	・その他言語	25.0	31.7	6.7	23.3	42.9	60.0	50.0	15.0

湯川・清田(2020)表7の再掲載 ただし一部修正(中国先回り組の人数)

【学習やコミュニケーションのストラテジーについて】

CAPの履修生は多くの学習ストラテジーとコミュニケーションのストラテジーを使っていました。まず、学習面ですが、以前に⑥でトランス・ランゲージングに言及した時にも述べましたが、予習段階で母語を使ったり、授業中に先生の話す現地語が分からないことがあると近くに座っている学生に尋ねてそれ以外の2言語を駆使して助けあったりしていました。現地で観光などに行った時に自分の発音を通じない場合には、スマートフォンの地図を見せてここへ行きたいとジェスチャーで示すと

か、スマートフォンに発音させるなど、画像やテクノロジーをうまく活用したトランス・ランゲージングで切り抜けたようです（必然性によるストラテジー）。

授業内外で、現地では出会う現地大学の CAP 生は 1 回生のみである（第 1 期生は先輩がいなかったため現地の CAP4 回生は存在しなかった）ため、日本からともう 1 つの国から来た 2 回生や 3 回生は目の前の 1 回生の言語力に合わせて現地語を使うようにしたとのことでした。また、2、3 回生のみや先生のみの場合には、自分の中の弱い方の言語でも積極的に練習して相手に自分の言語使用に付き合ってもらうようにしたとか（積極性の表れとしてのストラテジー）、疲労度が増してきた時には楽な方の言語にスイッチしたといったようなストラテジーもありました。言語をミックスした造語を CAP 生の間で共有し、いわば自分たちの間でのみ通じる秘密の単語のような扱いで使っては楽しんだというエピソードもありました（豊富化へとつながるストラテジー）。

以前第 I 部の⑧で CEFR（欧州言語共通参照枠）に言及しましたが、CEFR (2001)でもその補遺版の CEFR-CV (2020)でも、多言語を使用する人々に必要な土台となる能力の一つに、「複言語・複文化能力 (plurilingual/pluricultural competence)」という能力があるとされています。これはまさに上の CAP 生が会得していった、相手が知っている言語の組み合わせと状況に応じて言語を必要ならばスイッチしたり混用したりしてコミュニケーションができる能力、および複数の文化が遭遇し誤解や摩擦が起きそうな場面があっても、いわば異文化のスポークスマンとして誤解を解いたり修復したりできる力を指します。相手への配慮と自分の目標達成を両方を達成するために非常に複雑な多言語生活を生き抜いた先輩たちは、まさにグローバル化の中で多言語・多文化の世界に生きる地球市民となって巣立っていったと言えると思います。皆さんも是非そのあとに続けてください。

注 24

湯川笑子・清田淳子 (2019)「常設化キャンパスアジア・プログラムにおける日中韓 3 言語の発達と使用—移動キャンパス 1 年目終了時—」『異文化間教育』50, 15-32.

湯川笑子・清田淳子 (2020)「立命館キャンパスアジア・プログラム生はどの

ようにマルチリンガルに育ったのか—移動キャンパス 2 年目終了後の自己評価にもとづく言語能力・言語使用状況—」『母語・継承語・バイリンガル教育 (MHB) 研究』16, 24-45.

湯川笑子・清田淳子 (2021)「立命館キャンパスアジア・プログラム日本人学生の日中韓 3 言語および英語が関わるトランス・ランゲージング」『母語・継承語・バイリンガル教育 (MHB) 研究』17, 123-141.

多言語学習ハンドブック
—キャンパスアジア・プログラム生と全ての多言語学習者のために—

2022年4月発行

湯川笑子・清田淳子・庵途^{あんど}由香（編著）

本ハンドブックは「大学の英語開講授業とキャンパスアジアにおけるトランス・ランゲージングの実態と活用」課題番号 16K02863（代表 湯川笑子）」および「文部科学省国際化拠点整備事業費補助金（大学の世界展開力強化事業）アジア高等教育共同体（仮称）形成促進」の補助を受けた研究の一部として発行しました。

印刷所 あおぞら印刷
〒604-8431 京都市中京区西ノ京原町15 TEL : 075-813-3350



キャンパスアジア・プログラム

立命館大学文学部